清俗紀聞 第四

御帙
卷之六 生誕
卷之七 冠禮
卷之八 婚禮

五
ヲ 7
3522
4

清俗紀聞巻之六

生誕

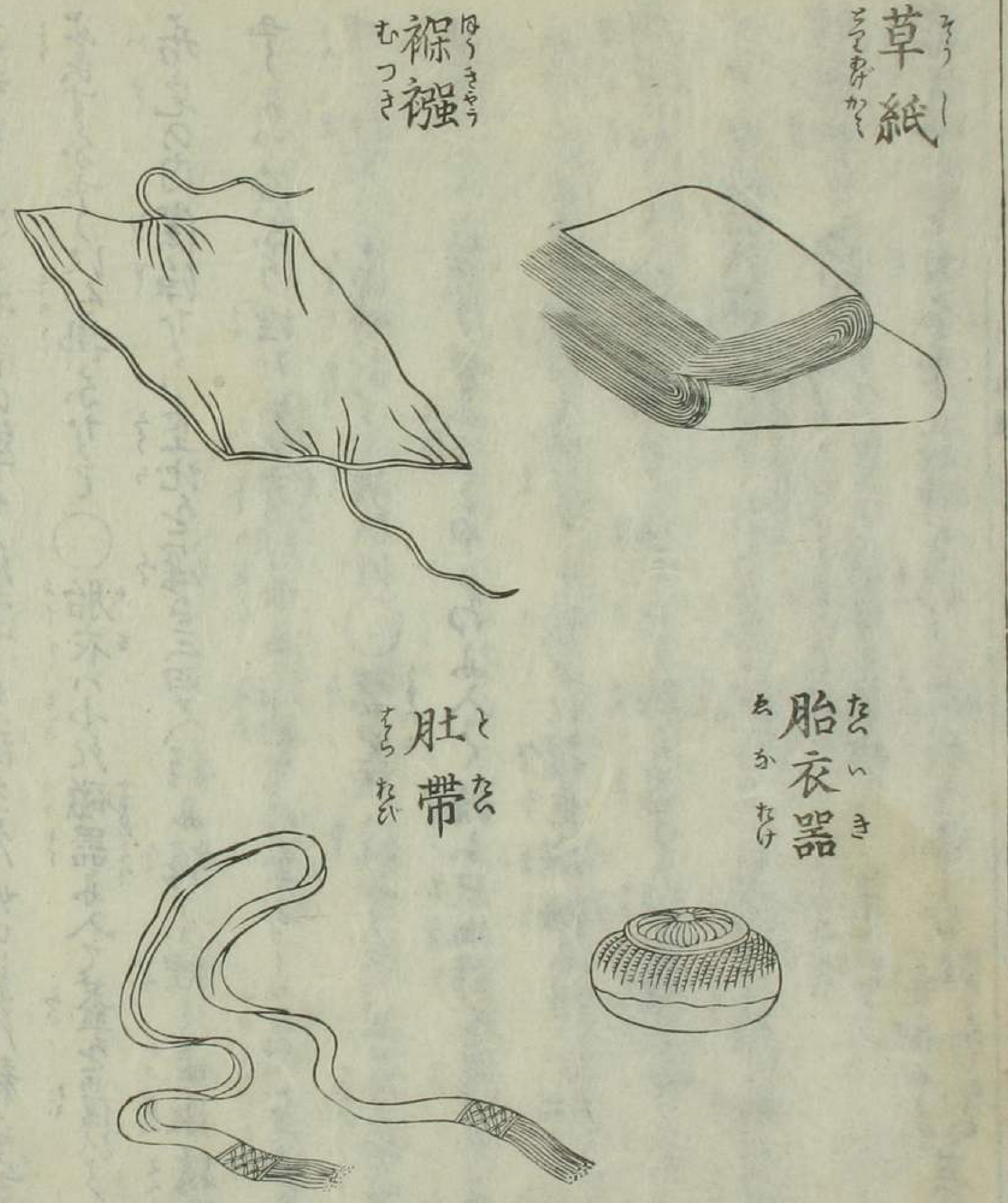
○凡婦人孕む事あれバ四ケ月五ケ月経て縮緞紗綾木綿の類を以て一幅長さ其人の肥痩に應じ肚帯ヲ造て腹に巻結び平日身を安静にして労せず或ハ重き物を持又ハ高き所に手ヲ上などせぬやうに心をもちひ食事も随分淡薄にして胎内を害ふまじく孕む事あらば予メ穏婆（一ニ收生婆といふ）を呼三日五日間に腹を按摩せしむ○臨月になれバ草紙褓襁を用意し婦産気催すときハ床の上に褥子を鋪安ひして穏婆に腹を撫らせ産に臨むときハ穏婆腰を取時刻を考へて力を添産しむ産落し身穏婆小児を取上手足身肉を改め竹篦を以て胎衣を切臍帯の切口を綿にて緊しくむすびよく包み腹に巻き又甘草湯を以て嬰児を

門ファ 號3522 巻4
昭和41年12月20日 原安三郎氏寄贈
41-9278

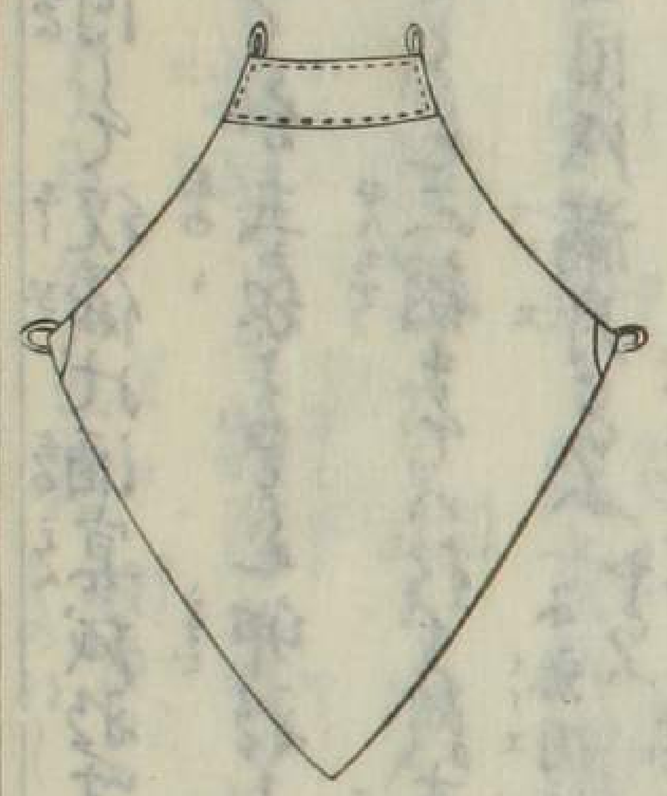
あら湯にて洗ひ口中に指を入て悪血等を洗ひ出し臍帯をよく拭ひ
綿あるひは臍切を以てはさみ上を襁褓にてつゝみ人の懐中に横にして抱
志めて産母を産屋に（一に産臺）至らしむ産臺は常の床の上に左右へ褥子を敷
き積かさね中に臍帯の動かぬやうに安坐せしめ多くは十日或は七日経て平
臥せしむべし血暈なくれば五六日すぎて平臥するにもあり産臺に坐して早速よ
糯米の粥を吃せしむべし いちどきに多分食せぬやうに毎時すこしづつ食せ
しむ糯米粥も多く一度にして其後は飯を食せ三十日の内は魚肉油物を
忌五七日の内は姜辛鹹味を忌み七日すぎて鹹味をすこしづつ吃せしむ七日乃
間は砂糖汁にて益母草を煎じ飲しめ毎度悪血を去る血暈なくれば
湯薬を用ひず産臺に居る内は老女阿媽の類昼夜附添産婦の頭をさ
まげ絆を占せぬやう因風寒を受ぬやうに心づけ家内も物静にして

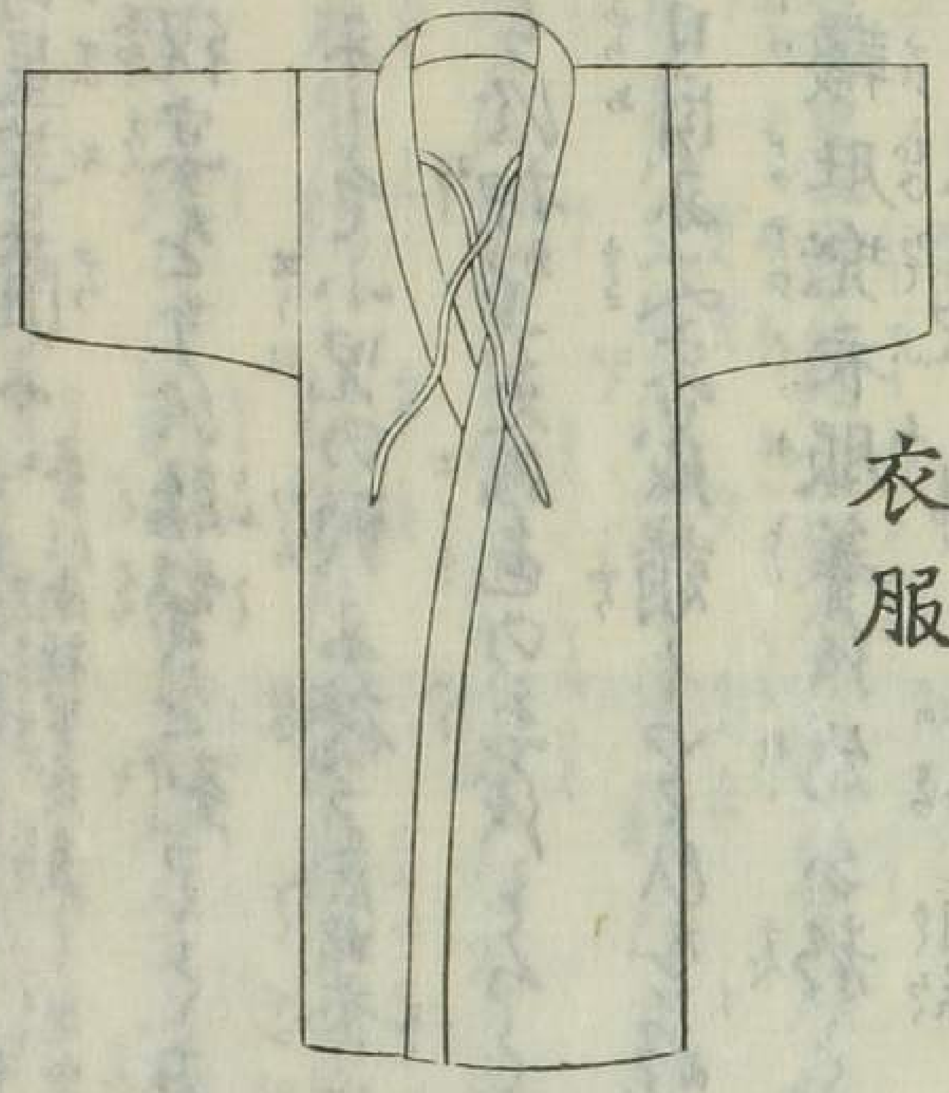
高聲あらびに物音の響等を禁じ気随に産婦の気を静に安寝し保
養するやうに心掛るなり ○胎衣は小き磁器に入て蓋を覆ひよく包
み宅の内潔浄なる空地を深さ三四尺程に堀て埋め永遠動かさぬ
やうにて埋むべし所の方位吉凶等の事なし昔時は古銭を文入て
埋るに疑あるも当時おほく用ひず ○嬰児を洗ふには其草湯に食塩を
すこし入よくかきまぜ小き盥に入て洗ふ只血汚を去までにあらため
にあらひ畢て臙粉を細末にして惣身に擦て襁褓につゝむ 臙粉は混気を吸ふなり
○臍帯は切ぬよく切口を結びて結び包て腹に当て外を臍切にて巻て三又六
日を過て臍切を解て乾不乾を見て乾ぬればおのづから縮て腹の内へ入る其
時臍切を去べし 臍帯を切に長さ二寸程残し切る若長が過れば後障りあり短き時は風湿を受る
○嬰児に乳を付る事は四時を待て乳汁を呑しむ 一昼夜にして其あひだ呑するもあり

産屋


草紙
襁褓
胎衣器
肚帯

牛黄黄連湯なぞを呑せあるひハ葡萄大棗を搗碎きて煎じ呑しむ
胎毒を去るが爲なり牛黄を用ひず乳ハ母の乳汁出ざれバ是をのら
ひ未出ざる以前ハ親族の婦女の乳を用ゆ○三日目或ハ又日目に麦の粉にて
餅を作り親ひそかに是を湯餅會といふ 一に三朝 此日男子にハ名を付る
男子の名にハ阿福阿壽官哥なぞといふ吉利字眼を用ゆ 吉利字眼とハ目出度
文字といふ 女ハ惣じて幼名を付ず十四五歳になりて詩作をするもの或ハ
書物なぞよむものにハ字を命ずる事あり其外ハ都て一娘二娘大
姐二姐と呼ぶ 惣領を一娘又大姐といひ二女を二娘二姐といふ娘ハ婦女を尊ぶ稱の俗語なり子より母を娘と稱す又父母よりも女子を娘とよぶ愛のことばなり
嫁して後ハ夫家の姓を唱ふたとへバ王氏なるものハ王娘と稱し張氏なるもの
ば張娘など稱す餘ハ是に準じ一生名字を用ひぬとの事なし 此湯餅會
の日ハ嬰児に湯浴させ 冬ハ寒の苦ハ拭ひて出す 袖のほそきものを衣服を着せしむ親など


肚兜


衣服

韈子

湯餅
鶏蛋

鞋子

に案内して祝儀は酒宴を催す親友より鶏鴨の卵を赤く染三ツ或ハ五ツおくる主家よりも卵おくりびに備を節に産衣裾等を親友此日より三朝まではおくる事なし（此送る物は雙方ともに目録を用ひず たゞ和る鶏鴨時にあたりて用るなり）

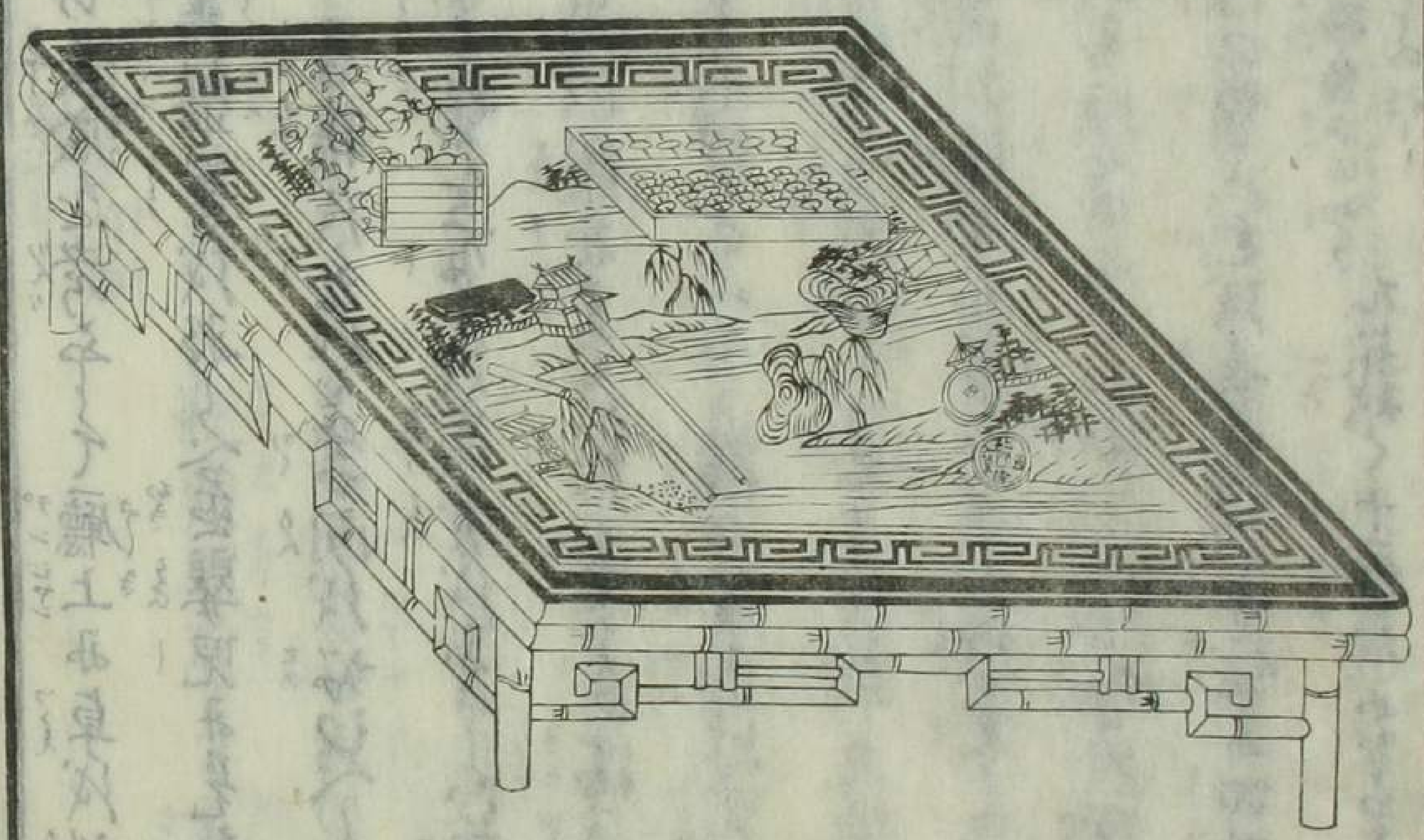
○三十日目を満月といふ 一に弥月 此日男女ともに胎髪を剃て湯浴せしめ壽星菩薩に（壽星菩薩ハ所々の寺院に安置し南極星を表し奉るなり）參詣せしめ家内の客を請し祝宴をなす胎髪を剃るとき先に菓茶を口中にて嚙碎き細末にして小児の頭に擦て且杏仁薄荷を用ゆるあり胎髪を残らず押かため五色の糸をもて結び且小児の寝所は帳内に掛置

○百日目に又客を請しいはひをなす満月百日祝ひの節客方より鞋韈肚兜衣服等を節に贈る親類朋友より魚肉或ハ鞋韈等の品を送りて祝ふ（此品も目録を用ひず）

○周歳にハ一年目をいふ 嬰児の長成を考ふるとて廳上に卓を設け上に毛氊を敷筆墨書籍金銀筭盤等をおくべし並嬰児に見せて取らしむ筆墨を取ときハ文筆に達し書籍を取れば学問を好むべしとて手跡を教へ儒学を習せ金銀筭盤を取ときハ商賣をなさしむ類のあらそふ此日親友を請し祝宴をなすは親友よりもおくる事も満月の時に同じ

○胎髪ハ残らず剃もあり又ぼんのくぼより額の際頭の中程なとに総角の如くに少し残し並もあり或ハ四五歳までハ残らず剃りて后又歳の大緒より髪を残し総角を結ぶもありぞれども嬰児より花帽子を戴く女子は頭のいたゞき又ハぼんのくぼに少しばかり髪を残し十歳程りなりて披髪とて額際の髪は毛を長さ五六歩位に切額にさげ置なし切禿の如くにして包搭（額頭巾の如きもの也）を戴く十三歳位になりて髪を残らず

周歳拿周圖

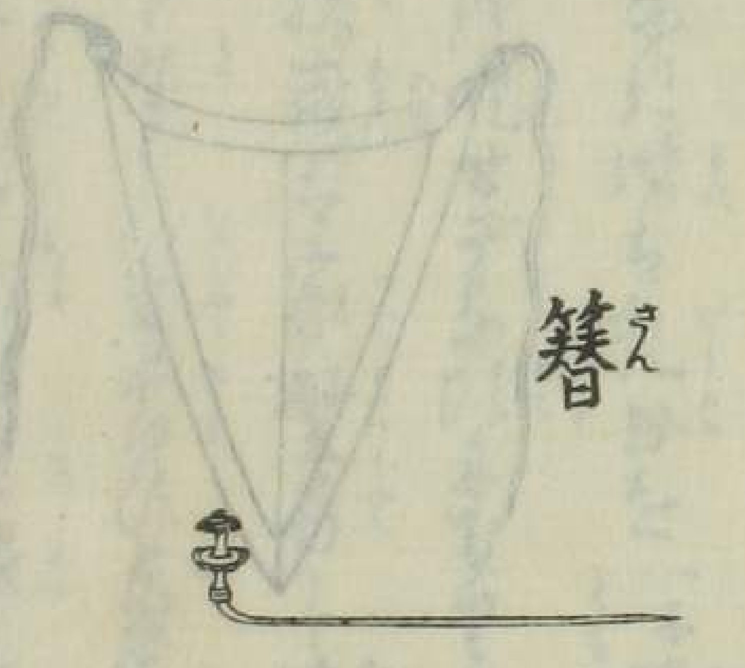


巻ひ包頭を用ゆ（包頭ハ帊包搭なり又ハ包頭とも云中或ハ包搭とも云ふ）雲髻或ハ金銀珠玉などの簪を
用ゆ髻ハ大人と同じからそて等からず香油を用ひて髪の色を潤し老年に
なりても冬寒き時ハ浩然巾とも帽子とも用ゆることあり惣じて男女共
に誕生して周歳まで祝ひをなし其後ハ年々誕生日に祝ひをなさず十
歳に至て誕生日を祝ひ請客ありて其後ハ十年目毎に誕生日に祝
宴をなす ○女子ハ総て七八歳になれば纏脚布（足を包む木綿なり）を以て足の
先を固く巻しめ決して其足の大くならぬやうにする事第一なり故に
七八歳已上ハ妄りに外へ出ず遠路へ行にも総て轎を用ひ歩行せしめ
ず近所歩行の節も婢の類決して手を携へ若下賤小戸ハ足を巻
事も無く歩行自由なり（此女子の足を包む事何の代よりはじまりといふ事詳ならず）
○嬰児の枕ハ外を木綿にて造り内にハ葉茶あるひハ菊花等清涼の

雲髻

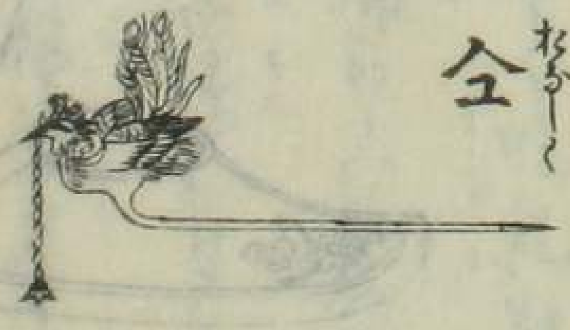
戴包頭圖

簪

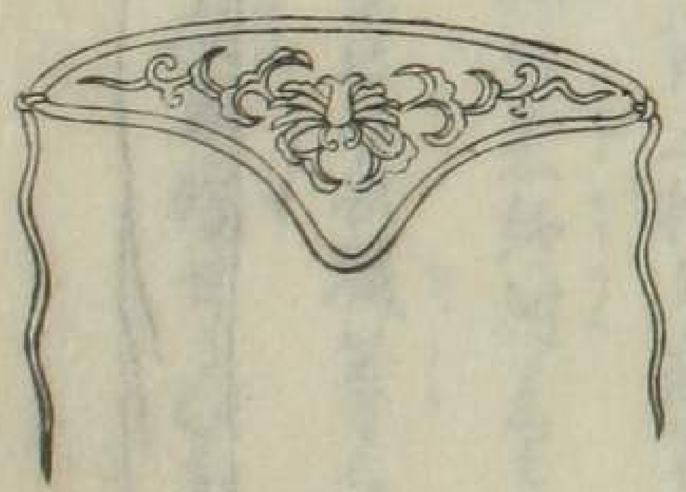


笄

仝



包頭

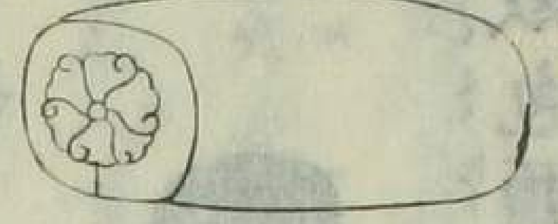


物を入用なる袋に小豆等を入小児の腹を押へ臥せられる事なし小児を都て周歳の頃まではハ横に抱くやうにして抱く事を忌む又生れて又七日経されども多くハ下に褥子を蒲安寝せしむ ○穏婆への謝儀ハ銀三拾目又拾目或ハ百日身分に應じて等かしば大戸ら衣服延等を送るも有

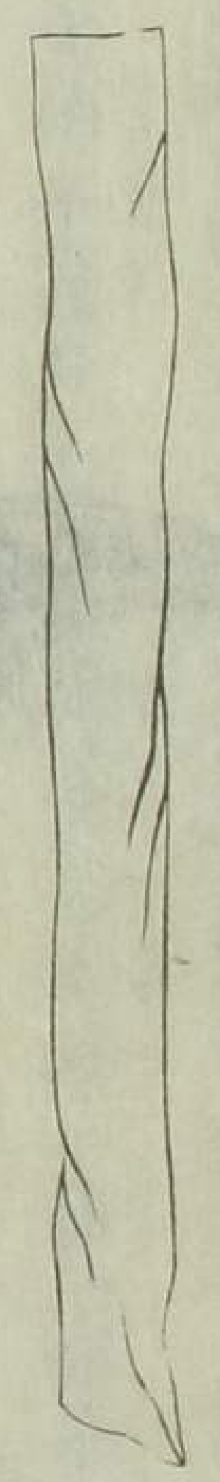
○都て産の時醫師を招き服薬する事なし産前産後ともに他病あられバ醫師を用ひず若血暈あるか或ハ難産等にて危き時ハ醫師を招くなれ血暈發して醫師間にあはざる時ハ石あるひハ鉄の物を火に焼て磁器に酢を入産婦の鼻によせて焼たる石鉄物の類を酢に入嗅せしめ醒覚せしむ又産後即時に童便一盞天目へ一盃用ひ飲しむるも血暈を治とす ○産縄の類あらびに天児新守札あるひハ蟇目等ハ事なし ○昔時ハ襁褓を男子ハ父の舊衣女子ハ母の舊

纏脚布

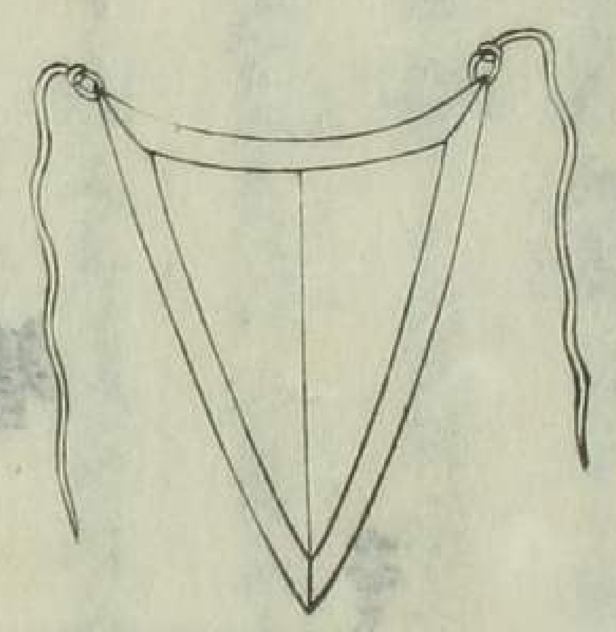
布枕



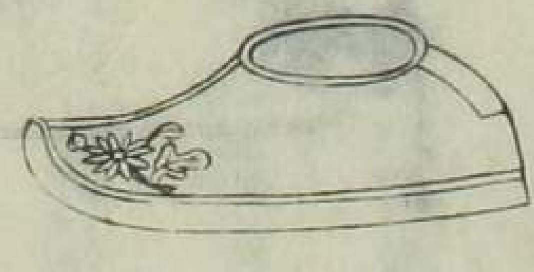
同上



浩然巾



女鞋



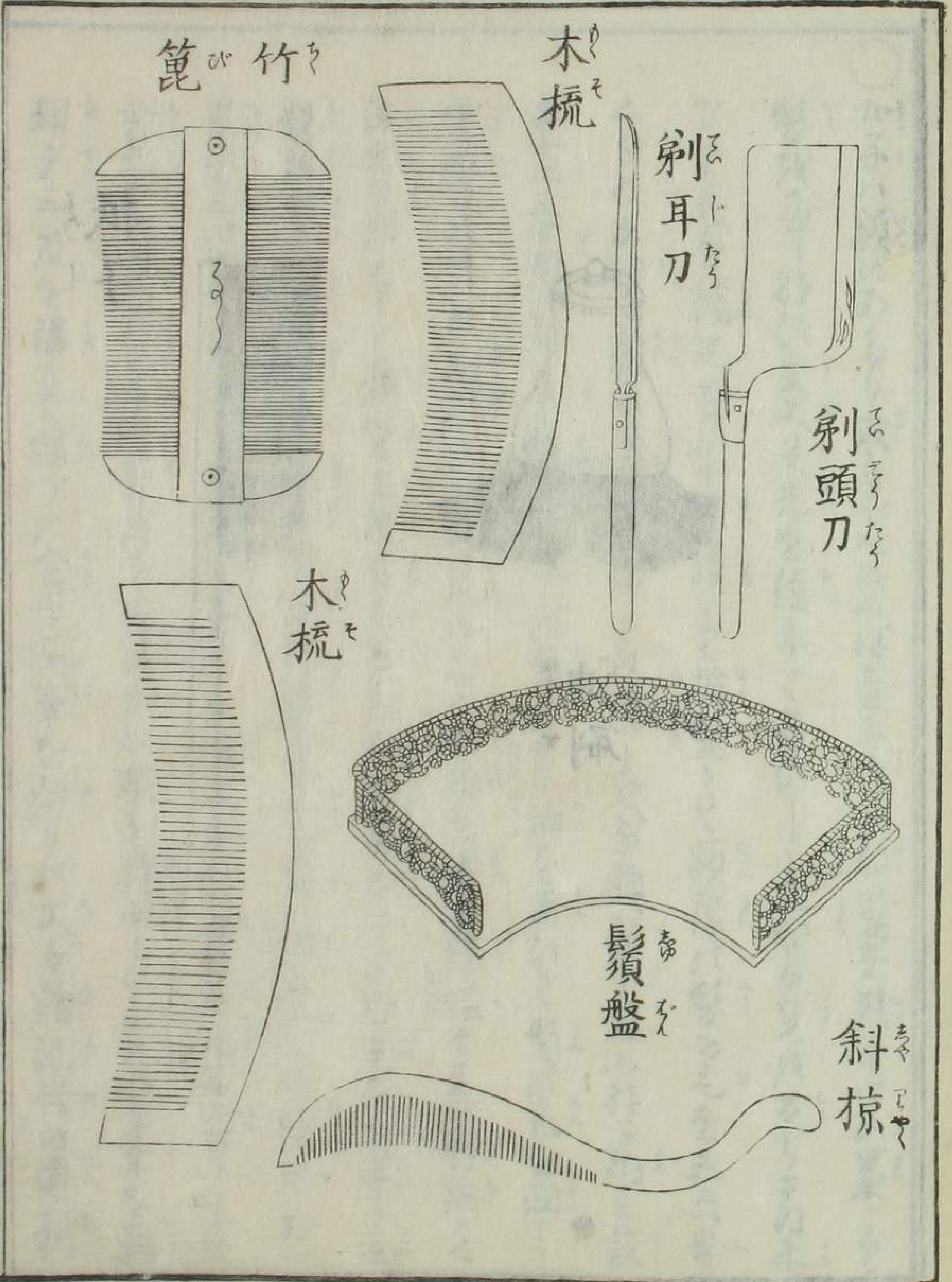
○衣服用ゆる說あまた當附録にしく行ふ事なし
子誕生の後に母に乳なき時ハ乳母を一に養娘抱へ置き吃乳せしむ
子ハ六歳にて乳を吃ざる故にむなくして乳母を帰らしむ若其子
長成の後官にも就き或ハ家繁昌し其乳母ハ子孫もなく倚靠
なべきものなれバ呼入れて一生養ひ置く事あり其所ハ多く又六歳
限りにして帰らしむ辛工ハ凡一ヶ月銀二拾目或ハ廿拾目ほどにて
來る者ハ衣服行李等を自身備辨ず差錦村より出る賤しき者なれ
抱へる方より一ヶ月七八匁拾五匁なりと云ふ又衣服等も主家より給りて
故なくして一生抱へ切ありしハ主家より人に嫁せしむる類の事なし

清俗紀聞巻之六

清俗紀聞巻之七

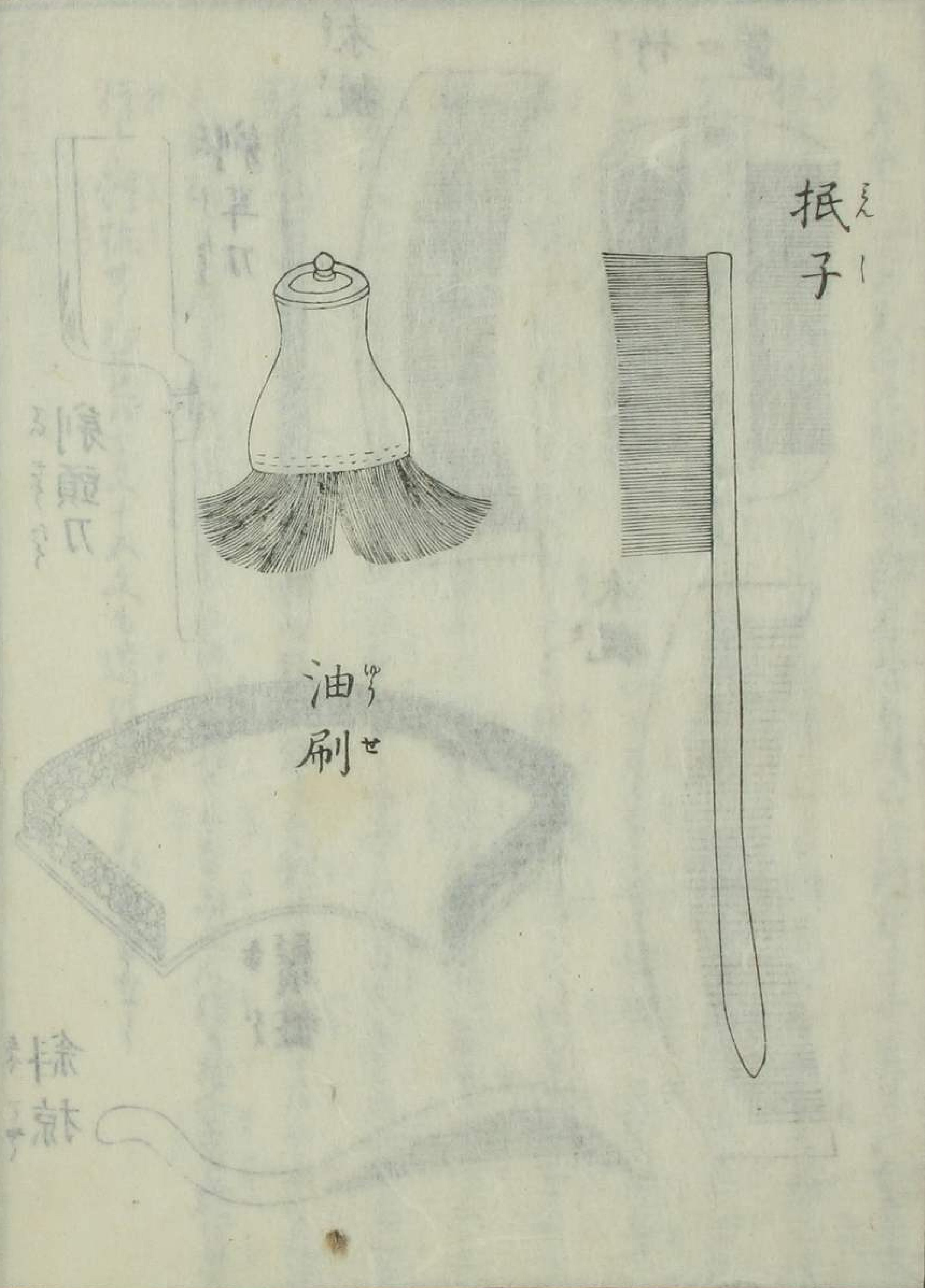
冠禮

○今清の代冠禮ハ古式絶て傳ふる事なし男子拾歳にて加冠すと云定例もなく十二三歳の内恰好見あはせ服を改る也人に賀する事もなし女子も笄歳とてハなく笄すること式なし十歳以上にて許嫁すれバ直に上笄ハ此日祝賀あるなり上笄を祝されあるハ許嫁を祝する心にて酒宴を設く ○男子ハ三歳より頭の中程に髪を生し総角に結ひあるひハ左右方へ分けて総角を二つに結ひあるもあり残りハ際まで剃て花帽を戴き十三歳にもなれバ天徳月徳等の吉日を選みて元服ハ ○元服の節ハ廳堂あるひハ房中にて剃髪人を呼よせ傍僕に命して面盆に湯を入させ其身ハ椅子に坐し剃髪人湯にて頭



を老者ハ頂の真中に髪を留て其餘を残らず剃去して其末ハ髪を木梳を以て梳し竹篦にて垢を去り能揃へ三ッに辮分け打立是を辮子とし云(此法苑珠林に出たり 周羅髪なるべし)髪先を紅或黄の糸にて留帽子を着ス二十歳余にもなれば花色黒等の糸を用ゆ帽子ハ其官の時ハ暖帽を着し外出ハ節々大帽子を着る元服の日とても親類を招請して祝賀する事なし

都て剃髪人といふ者ハ下賤の者にて剃髪梳頭を以て渡世とす一人まへの價銭ハ六十文甚賤くいふ元服の節初て呼ぶときハ百文も出ス小児の頭も剃髪人を呼ふ及び富家内の奴婢ハ類ふ命じて剃らしむ凡一ケ月に両三度ほども剃梳するのなり又剃頭店あり家内ニ部手を置三人程も抱へ置下賤の者行て剃梳せしむ其價ハ十文十五文も遣ス一定したる事なし



○女子ハ額のあたり或ハびんのくぼの辺に少し胎髪を残し二三歳より髪を置しめひ又足先を揃へて美しく包む是ハ足をちぢまさぬ為なり足先を纏足といふ十歳頃よりハ披髪とて額際の髪の毛を五六歩ぐらゐに切て額にきざみなびし包搭とて額頂巾の中に入る物を裁き十二三歳になりて髪を蓄へしめ其ひ菜油を用ひて髪の色を潤し雲髻ハ纏るも包頭といふ髪包の上にうへ物を用る許嫁すも其ハ聘納ある後吉日を択えくて額髪生際眉毛等を剃付弁をさしむ是を上弁と云親類朋友等を請して酒宴を設け祝賀す女の髪ハ婢に命じて梳らしむ

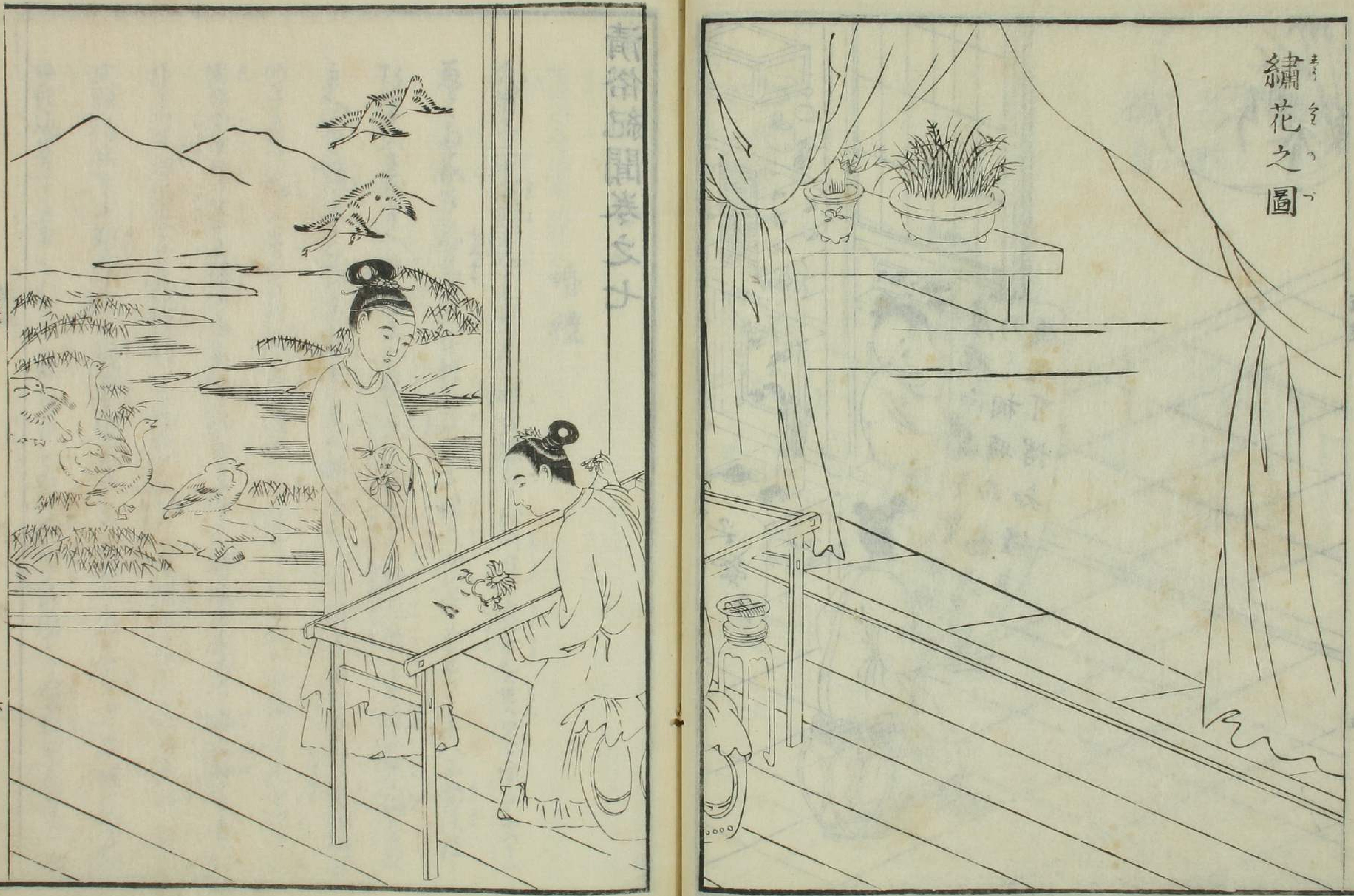
○男子三四歳になりて自身食事をする頃にあれバ母の手より子に教へまづ食事の時ハ右の手に箸をとり左の手に碗を持正しく食はしむ事を教朝夕二度を限りて猥りに食する事を許さず又諸礼儀の道親

類等は楽に節作揖（揖は両手を組合せ身をかゞめ手を面の近くまでさげる）叉手（拱手と同じ両手を組合せ手を胸まであぐる）叩首（頭をさげる）等は作法長者に下りて兄弟と争はず睦まじき道をおしへ又十六歳までならべ士は勿論農工商ともに讀書寫字を習せ七八歳になれば身を修させ行ひを正しくし先祖を大切にし能家を興す道をひらき身上福有なれば先生を宿許に請じ至りて貧なる者は義學に遣はし中通なる者は學舘に遣して詩書の義をあらはしめ詩を賦し文を作る事を習はしめ進退應對の諸礼式を專ら教導す其飾りも無く行ひなきあしきはあるひは叱りて又は責懲して戒しめ正しく再びする事を許さず女子とも虚言を禁ず射弓騎馬算盤等の事は其人々の好みにまかせ稽古は女子は專ら母の手もとにおいて食事等の作法をしらしめる事男子に劣る事なし又十六歳になれば起居の行義諸礼を教へ猥りに他づき

十歳迄は外へ出さず家に居らしめ手習其外に持事を教へ十歳にも成ば其は繡花針工紡織の道を教導す其大戸の衣服も多く縫匠を招きて仕立るにも唯貨包烟包等の縫事を教へ其程によりて衣服の仕立方を教へ又は母親繡花等の道を能せざれば近隣の婦人を請じあるひは繡娘（繡花を渡世とする婦人なり）など云ふ藝の人を呼迎へて習はしむ又七八歳の頃より女先生を頼みて写字は勿論讀書詩作等を教ふる人もあり（委しくは閨学の部に見ゆ）十二三歳にもなれば閨門を出でゝ人に見ゆる事を忌む故に多く奥の部屋或は楼上に籠りて門戸を構へ出入の家内にても年頭などにもなれば男女同席せず煮焼の事は其自然にまかせて諸支に知らしめぬ事なし

辮子
花帽
總角

度德而處之量力而
行之相時而動無累
後人可謂知禮矣



繡花之圖

清俗紀聞巻之七

清俗紀聞巻之八

婚禮

凡男子二十歳餘になれば其父兄婦を娶らしむ何方の處女を貰んとするにまづ兼てより女家にて心易き人を頼み說親と媒人女の方に來り主人に面談致したく申入ければ主人外廳に出迎へ先生勞駕有何見教と云互に寒温をのべ主人より請坐といへば客有坐と答へ辞儀をして椅子にかけ令愛を何方の子息の嫁に貰ひ度旨を述ぶ作伐せしむといへば女家の主人若し不承の小女箕箒に備ふるにたらずなど答へ辞退の色あり媒人押て申入るれば然らば父祖伯叔にも相談致し返答申述べきとて媒を返す其の後又帰座に父祖伯叔など列座にて領掌の返答することもあり或は其後主人媒の方へ以て返答する事もあり是父祖なきものは伯叔兄の内より應對することなり又

蒐くりまて入覔の者なるとハ外廳ニ坐せしむるにも及ず直ニ内廳後軒ニ至く應對ス男女幼穉の時より聘定（又訂姻）する事もあり十四五歳ニありて說親を亦もなり幼穉より聘定せざるとも未曾做親己前ニ死する事あらば相互ニ定式の喪服を着し喪残りとも定式の喪朝ありて女を再嫁せしめる男ハ男家へ内證して男家異議なけれバ再嫁せしむ先を再醮と云若男家より一旦貰ひたる事なるとハ是非贅婿を入て妻となすべしといへば女家異儀あるまじきなれバ成長の上ニて約束の通り男家へ遣ス女死する時ハ喪朝畢て其女の妹あるとハ妹を貰ひ若相應の妹なけれバ外ニ縁談す惣て婚を結ぶニ隣人ハ街長ニ届る官吏へ長官へ届る事なし

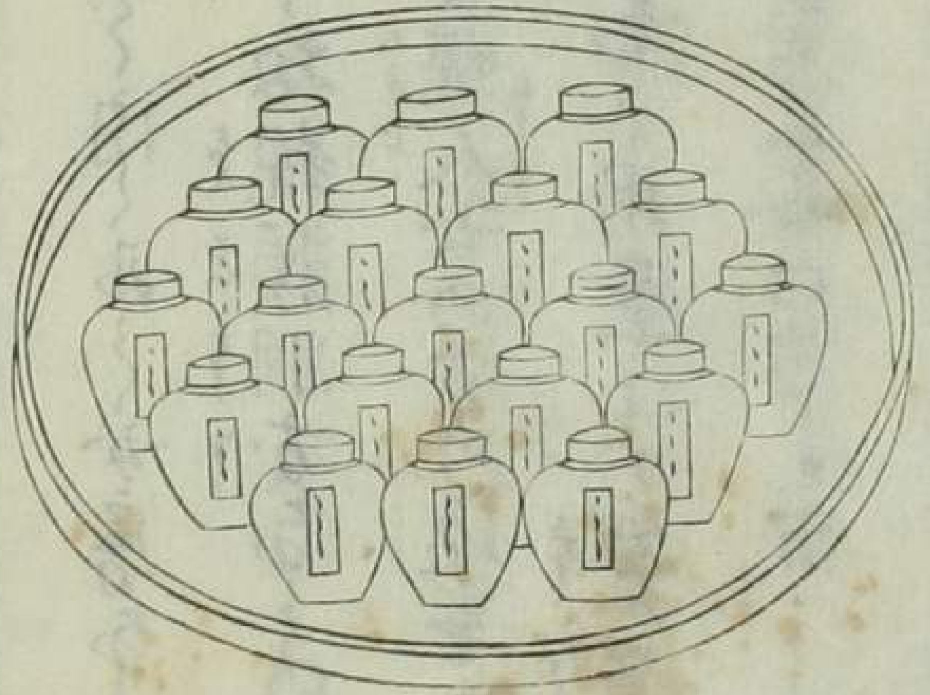
○媒人ハ一ニ氷人とも云 又中人とも云 親類又ハ朋友などの内女家を熟縁の者或ハ女家出入の輕兒阿媽收生婆 一名穩婆 なとよく云ふ者或頼みて内分に入なし或ハ何方ニハ幾歳位の娘ありて此方の嫁に貰ひたきよしや などく聞くにつく女房などに阿媽などよりて云入る事もある此下媒人などく口入し相親類朋友などの内表向の媒を頼み女の方ニ貰ひに行もある媒人女の方え返事を兼て男の方に返答する時男の方ニても酒肴など用意して饗應する事もあり又別段ニ吉日を撰み招請する事もある女の方も同じ 緣談調ひたる上ニて阿媽などに謝儀を贈る貧富によりて等しからず

○雙方允諾の上二三日を經て吉日を撰み 天德月德などの吉日也 嫁貰ひの書簡を遣る此時ニ菓子茶或女の方に送るに小さき錫罐に入て数拾罐百罐程の不同あり送茶とも云又授茶とも云 茶ハ本根を移し植ずして子をまくといへる故ニ古の人婚を結ぶに茶を用ひて禮とする事なりとかなりしに此遺るなりといへり

○書翰并茶を送るニ奴婢を 奴ハ下男 婢ハ下女 使として遣す或ハ媒を頼みて遣る媒

ゑて駕篭に乗て行末もありて女の方に来りて有人在麼請教と申入べし
取次の奴僕出て右の書翰并に鉄請取 受取ていしに宜る ありあふ式なし けふの趣を主
人に達して主人書翰并に受取返書に返翰を認め取次の者より右の
使の者に遣す媒人来らば主人對面して

授茶



書翰男家式

初許婚姻禮帖式用梅紅全帖恭求台允四字用金箋寫父或族長出名

台允

恭求

某某郡年家眷姻弟某姓名端肅頓首拜

書翰女家式

仝

台命

謹遵

某某郡年家眷姻弟某姓名端肅頓首拜

封筒背面之式

封筒正面之式

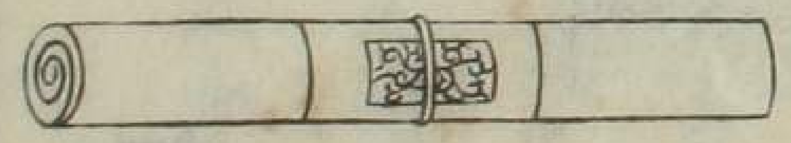
禮帖封筒用大紅紙正面金簽寫全啓二字

接縫用糊牢貼口不封

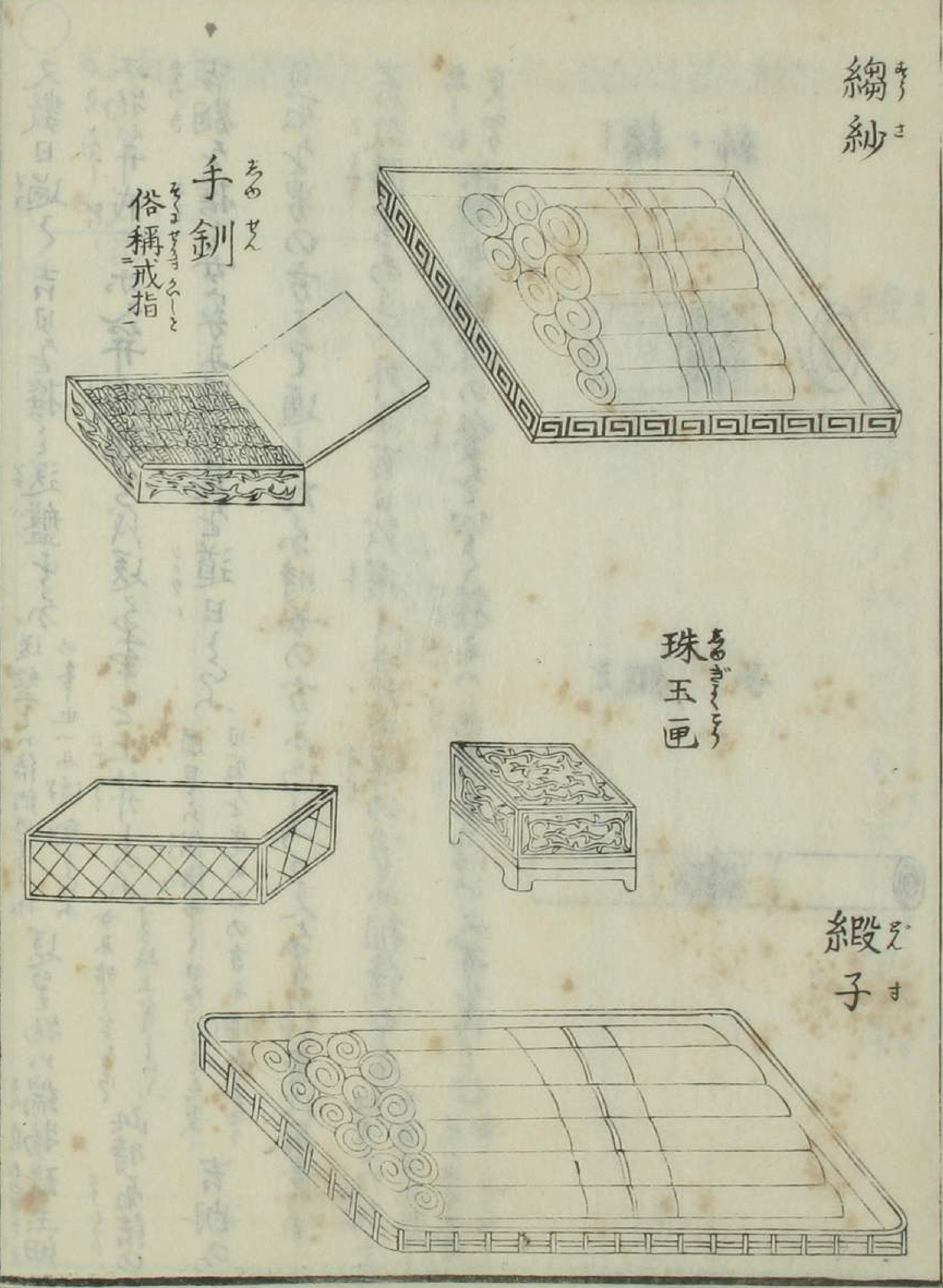
○又數日過て吉日を擇びて送盤をなす（送盤とハ結納の送り物の事也一ニ遊盒といふ）送る物ハ端物珠玉細工物笄戒指ホ笄戒指等を送る事を上笄といふ（女ニ始て笄を作す故上笄といふ）此時又結の吉期を擇て女家ニ通ず是を道日といふ（道日とハ俗語ニいふ日をきるといふ事日取を定め女の方ニ通ずるなり）吉期の日取を男の方より通しおくに時女の方ニおいてつゝしみあれバ甚に用意す若故障あるときハ外ニ吉日を擇て再由媒の方ニ相談するなり（此吉日ハ陰陽先生道士択擇す）忌しむ支あり此時女額際の髪を切て額ニハ包頭をはけ又笄をさしむ（是ハ此方の額直しなるべし）

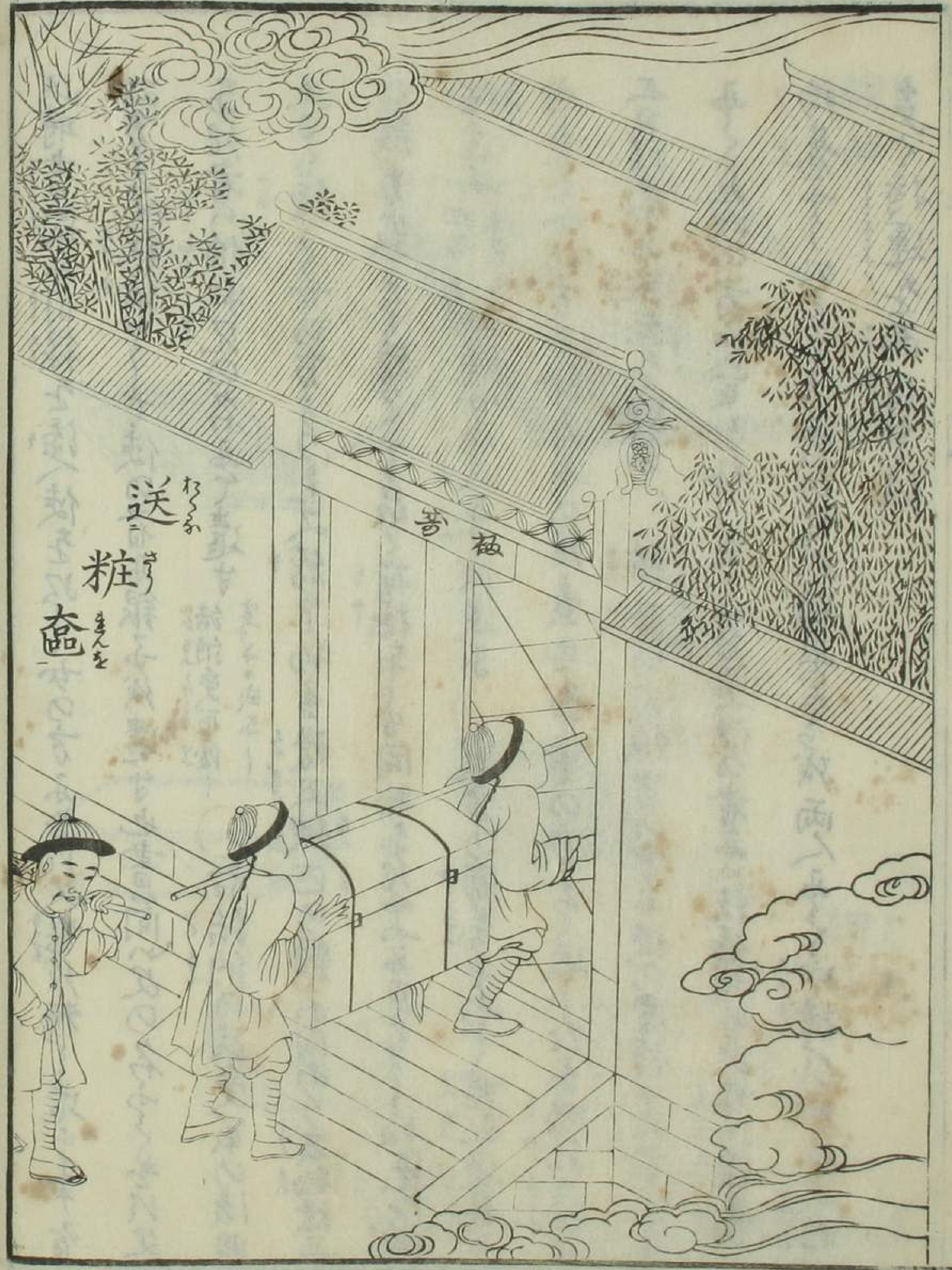
綸紗

緞子



○此時書簡に目録を添へ使を以て女の方にもたし又媒人も類を遣す事有
双方より祝儀として使の者に銀子を遣す也書簡ハ父の名にて遣し父
なき者ハ伯叔兄の名にて遣す 結納受取済し 家々の式あるへし ○右結納の品受取の後四
五日も經て女の方よりも又結納の物を珠玉緞匹の類不同あり反物珠玉
の類男家より結納せる品々撰揀すれども同物なれども見えさる如く是を回
帖といふ 回帖とハ返答也 此時女の八字を送る ○双方の贈答すみて婚礼道具の
用意也女の方に諸道具の用意出来て男の方より通したる婚礼吉期の
三日程前に粧奩を贈る ○粧奩の目録男の方に使の者持ゆき男のゝ
みくる次の者受取りそれぞれに附並使の者にハ祝儀を遣す嫁入道具ハ
鉤臺よりかくのごとくのみのせ又道具を遣す両人にて中に擔ひにして人数
多く持運を面目とす





送粧奩

用梅紅全帖第二頁正面寫起毎四行或六行不等納采加笄之敬六字用金簽寫頁數六頁為率故其物件多則毎頁多寫少則少寫出名與帖式同

吉 開
鳳冠 一對
霞帔 全襲
珠花 十對
金花 幾十對
綵緞 幾十疋
黃金 百鎰
奉申
納采加笄之敬
某某郡年家姻弟某姓名頓首拜

女家同帖式寫法

吉 開
朝冠 一品
袍套 全福
文房多寶 全副
京靴 成雙

出名與男家同

某氏八字
甲子年乙丑月丙寅日
丁卯時生

女家送粧奩帖式同前 岳父出名

吉 開
梳粧臺 全副
圈椅 滿堂
立臺 成對
圓爐 成雙
衣箱幾十對
子孫桶千代
慶 餘

眷生某姓名頓首拜

男家回謝帖式

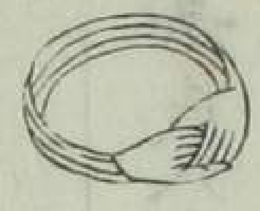
領謝二字用金箋

謝

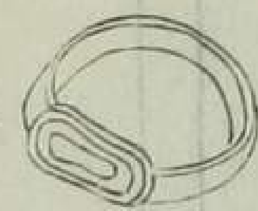
領

門下子婿某姓名端肅頓首百拜

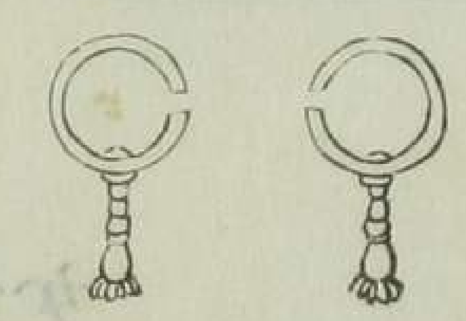
同心釧



戒指

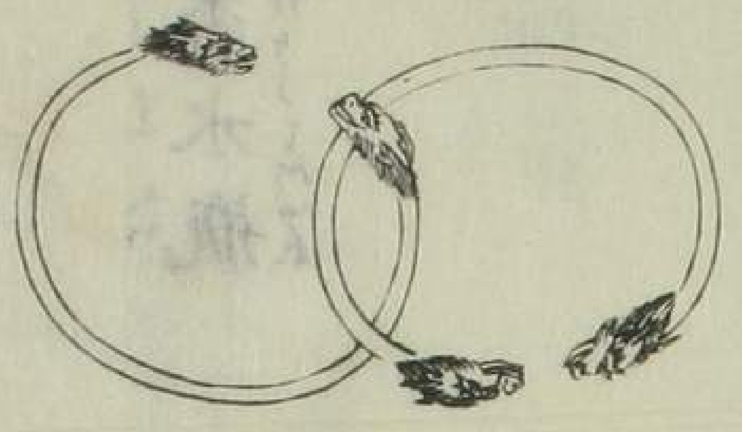


耳環



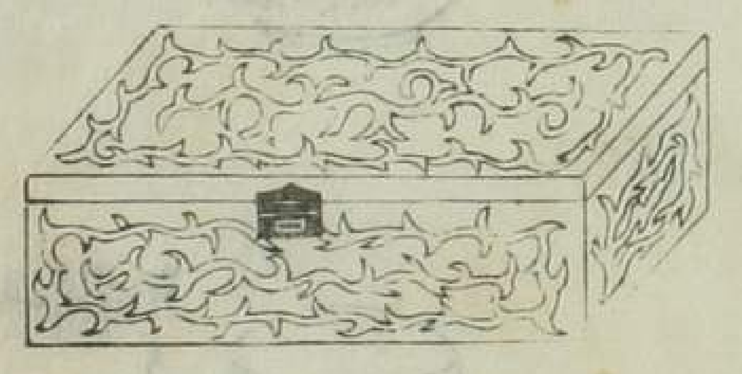
釵鈎

手鐲

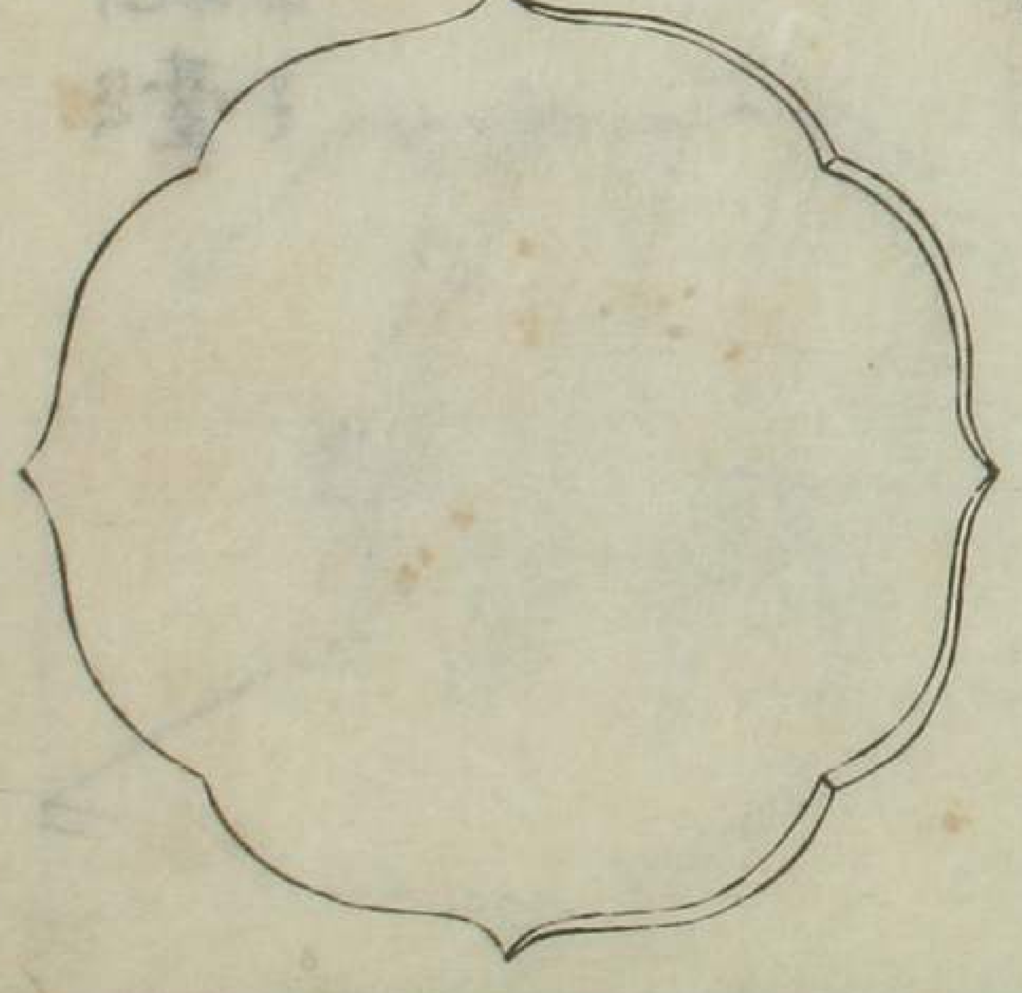


鏡子背

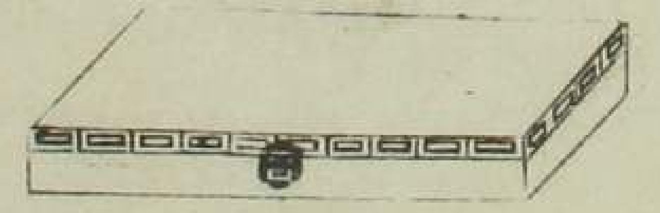
拌盒



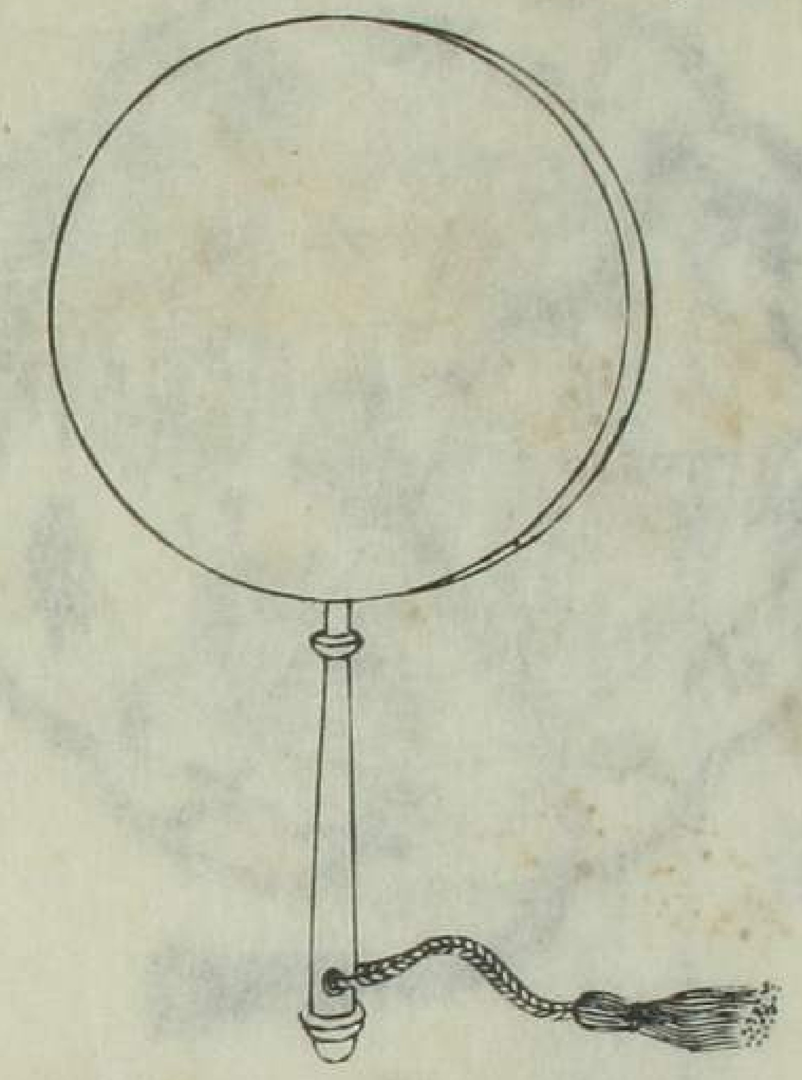
鏡子面



針線匣

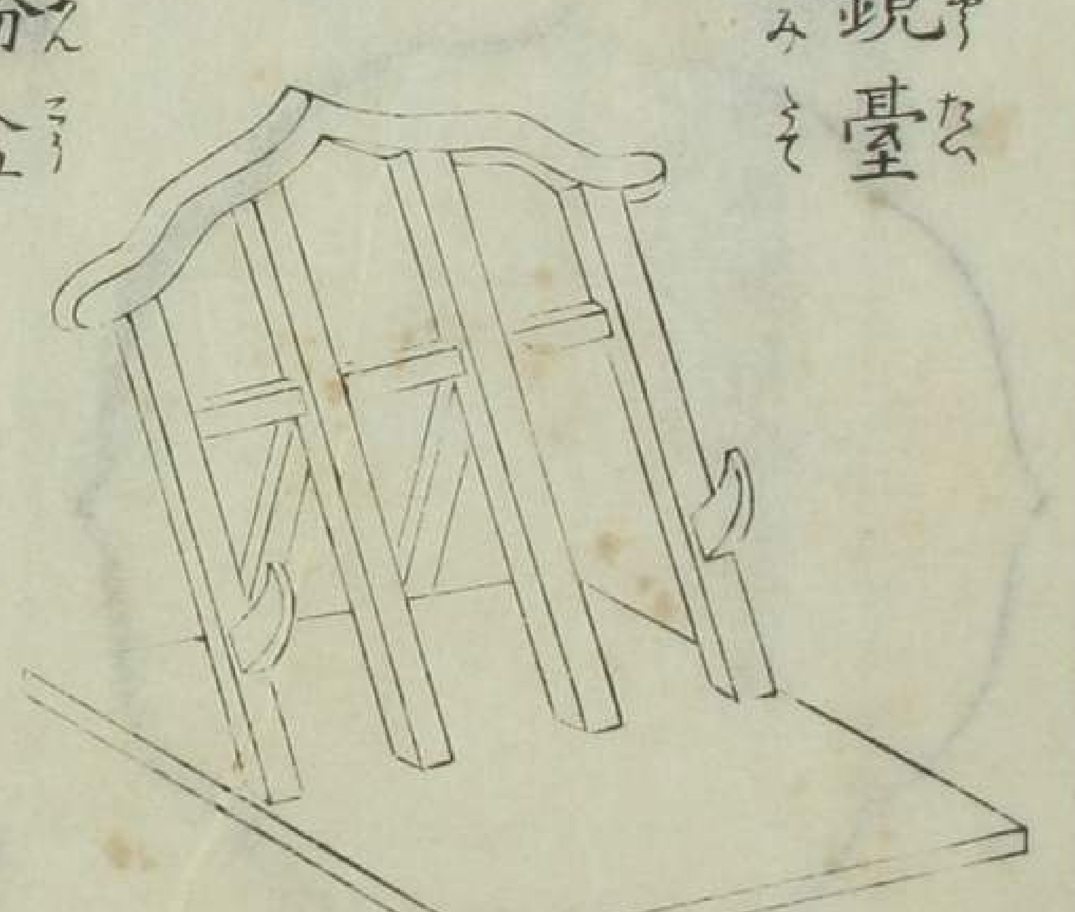


鏡

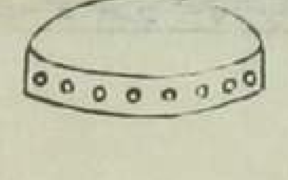


香水瓶

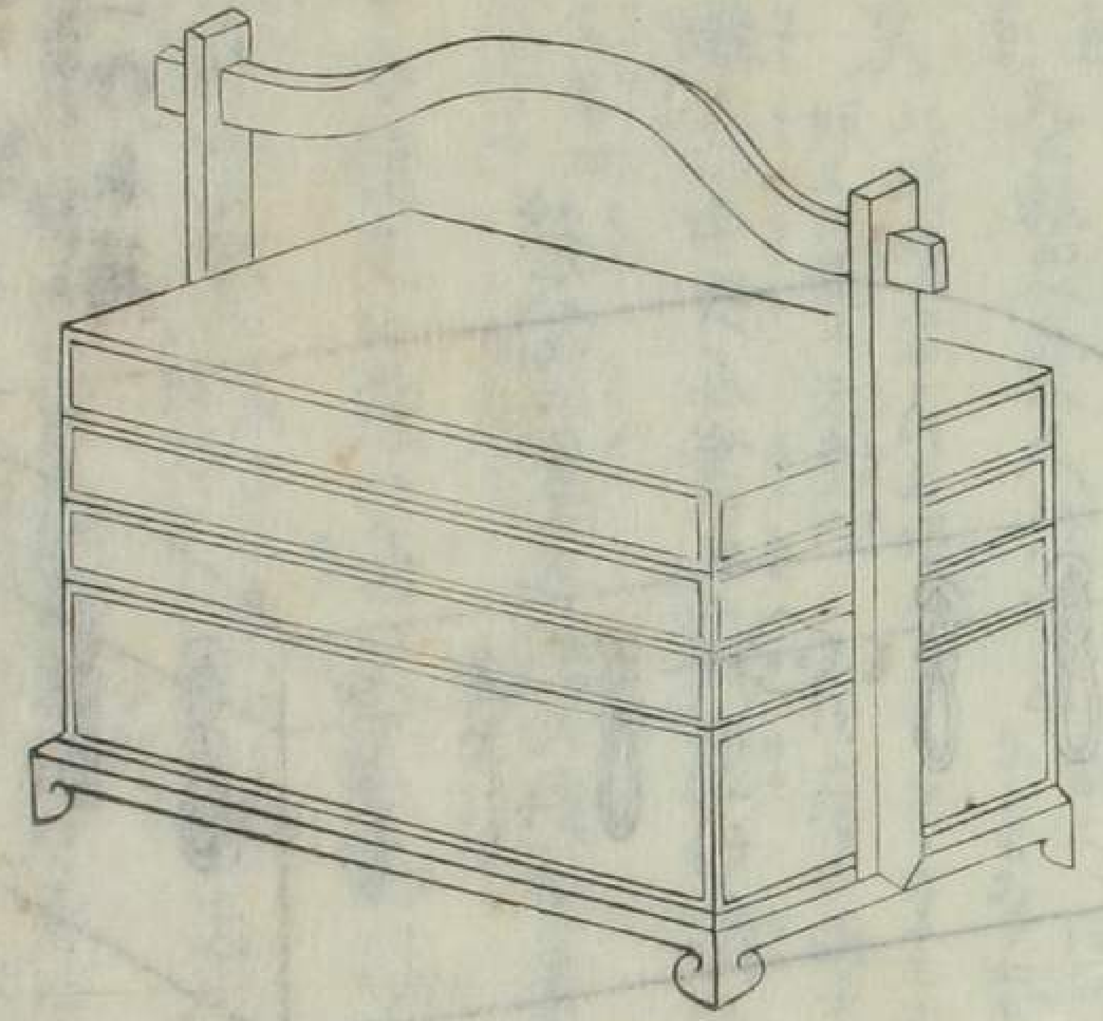
鏡臺



粉盒

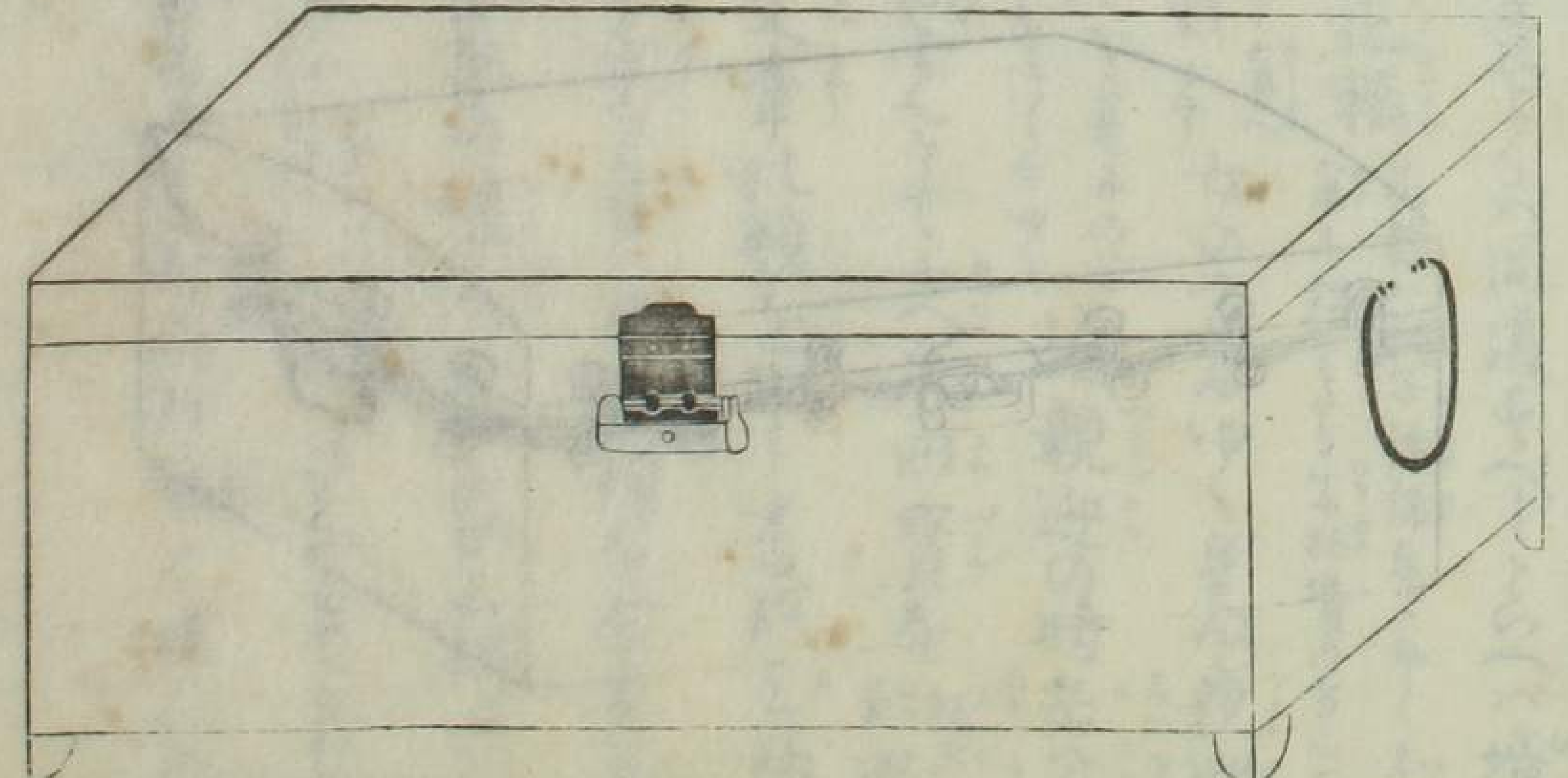


櫛笥



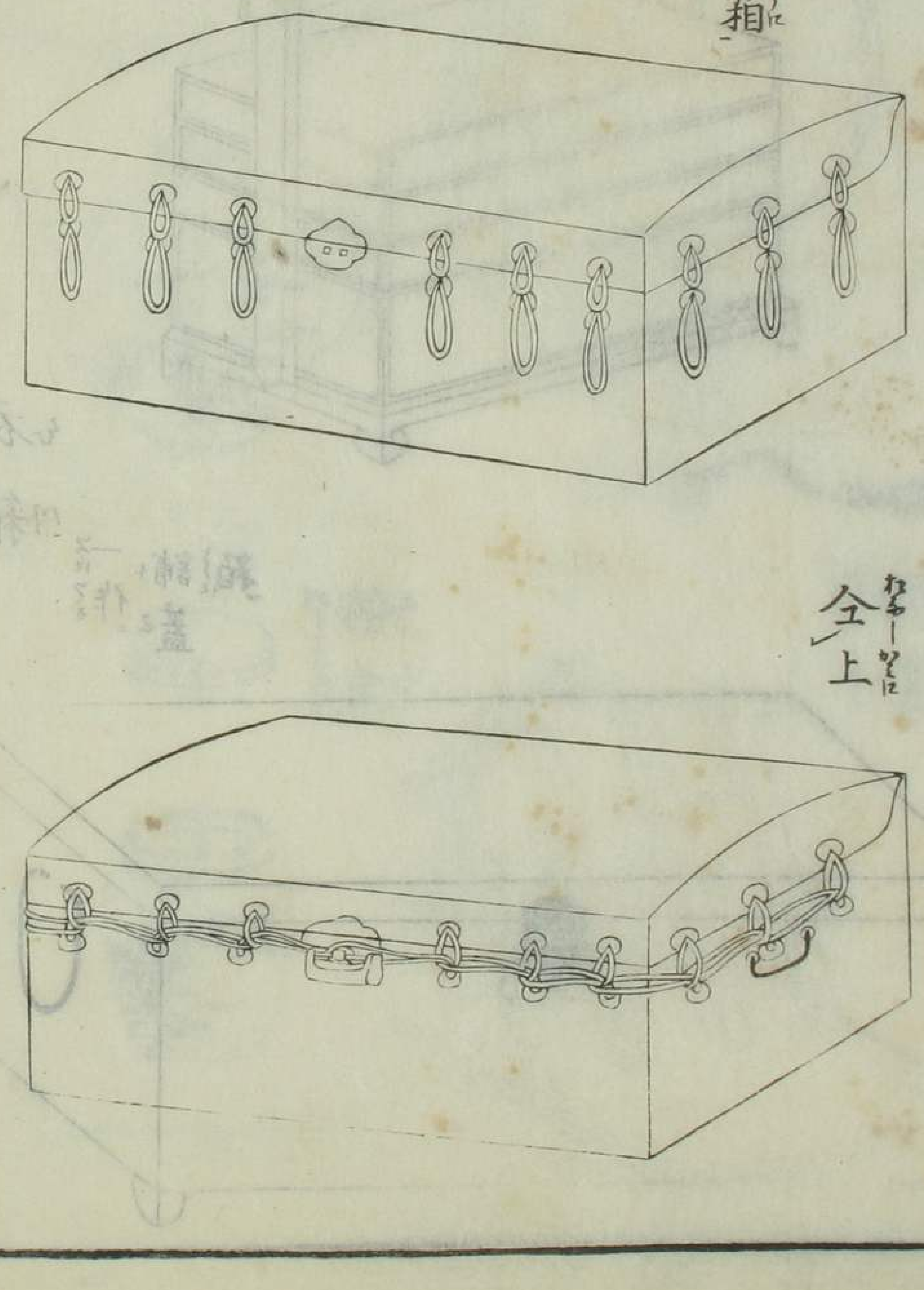
衣箱

一作舗蓋箱



○親迎の日ハ七ッ時分より媒人男の方に來り用意よくハ同道すべしといへバ壻衣服を改め用意して 壻の衣服常より立派に出立はなやかに極めたる色目なりなし 花轎 花轎ハ瓶子綵綿などにてかざる乗物壻の方にて用意するなり を整へ樂人を雇ふ 樂人ハ法師藝者の類にて盲人なども有り常に樂をなして業とす 女の方にゆく是を親迎といふ 此時壻ハゆかず媒人むかへにゆく事もあり媒人も壻もかゝる轎にのる 媒人の轎子先へ案内し其後に壻の轎子其後に花轎をおくらせゆく 壻親迎の時岳父の廳上の中央に書案を設け壻の才藝を試んとて文房四寶を 紙墨筆硯を文房四寶といふ 整へ雲箋 詩文をかくかみ に詩の題を書て出し或ハ文章の題を出し書を乞ひ來る詩文の題ハ岳父より出し又女詩文に志ある者ハ女より題を出すことあり

○大戸の家ハ 家口十四五人以上を大戸といふ 媒女人にて男家の媒人ハ女家に行ず女家の媒人ハ男家に面談せず中戸の家以下ハ 家口六七人以上を中戸といふ さらにてもなしあれども婚姻の花筵にハ両家の媒人を來りて花筵を助く媒人の妻を來らば



○婿の轎子女家の大門前に至るを見れバ女家の奴僕婿より祝儀を求めん為門を堅く閉て容れず此時婿の下部より女家の下部へ祝儀を遣し門を開きて入らんと云へバ門をひらき婿の轎子を門内に通す 此祝儀ハ家の貧富によりて五十目百目二百目等なり ○此夜婿の方より女家へ三度の書翰をおくる初度ハ迎に轎子をやるといふ書翰二度目ハ支度ありたしと云書翰三度目ハ合卺の近きを遣るといふ書翰なり女の家半町程も前にて媒人の懐中より初度の書翰を出し拜匣に入て使の者に持せつかはせバ女家よりも復簡く主人門前迄迎ひに出る

男家迎娶三帖式用大紅全帖綵輿ハ恭迎四字用金箋　父或族長出名

第一道帖式

迎

綵輿恭

某某郡年家眷姻弟某姓某名端肅頓首拜

第二道帖式

速粧二字用金箋

粧

速

同前

第三道帖式

恭迎合巹四字用金箋

合巹

恭迎

○女家のかしこ手前にて媒人も婿も轎子よりおりて門前に至れバ主人出むかへ廳堂に（一に外廳といふ）案内して請上坐といふて手を拱て挨拶す媒人も今日恭喜と會釈す主人より且請坐といへバ媒人手を拱て得罪といふて椅子に坐す婿ハ始終媒人の跡に引添て諸事媒人の指圖に任す

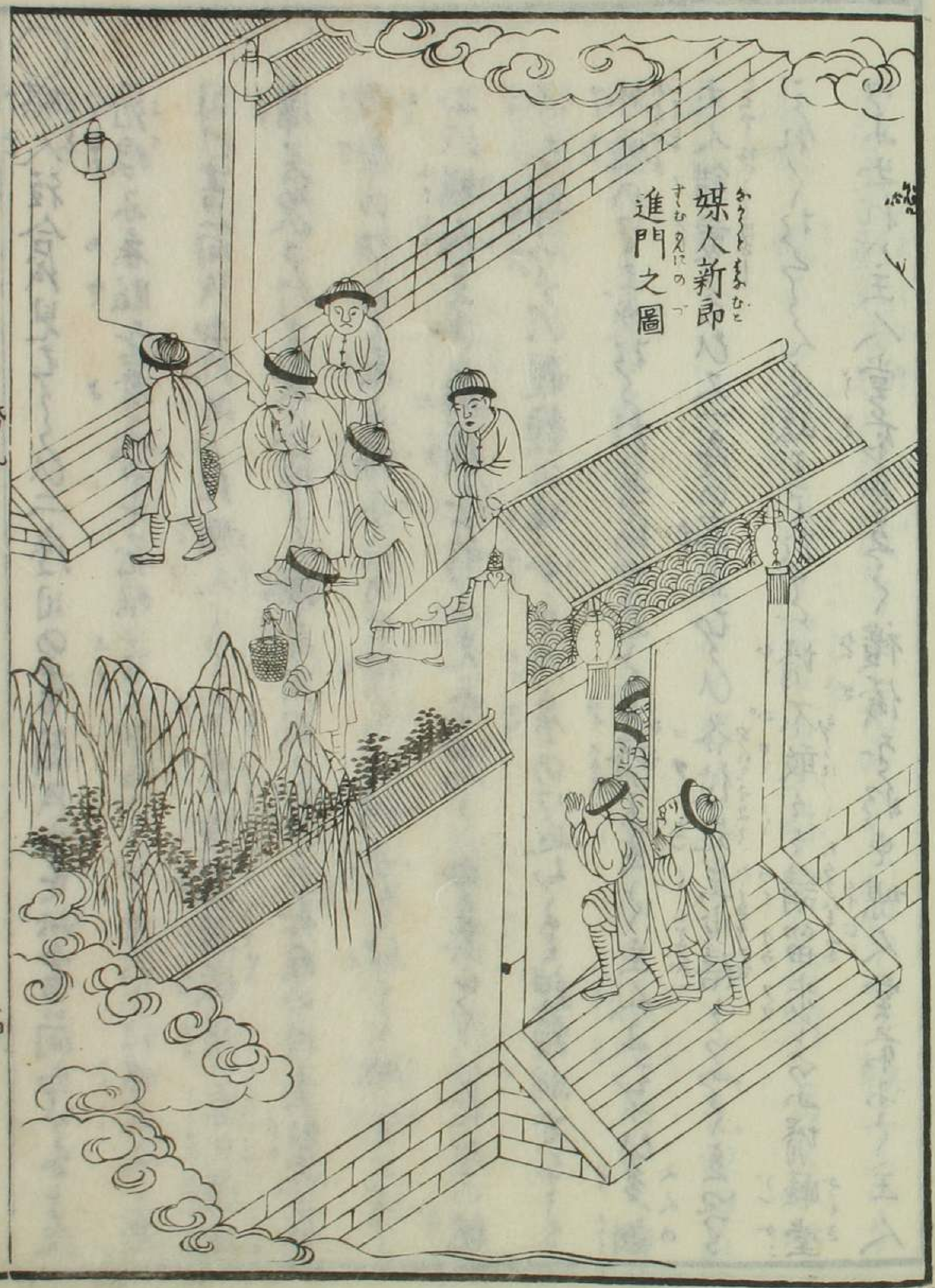
○花轎ハ新娘の内房へ入置く（内房ハ女の居間也）

○樂人ハ奥の一間に扣へさせおく

○主人自ら茶を取て媒人に進め今晩多勞且請拜茶と挨拶すれば媒人椅子を立て茶碗を両手に受取得罪多謝と會釈して元のごとく椅子に坐し茶を呑親類朋友なんど相伴の面々出て媒人にむかひ今晩勞駕種勞玉成請阿と挨拶すれば媒人立て又おなじく請阿恭喜々々といふ各互に手を拱て逸々挨拶をみなえのごとく媒人は椅子に坐し主人は内に入て相伴の親戚朋友なども椅子に坐すれば奴僕菓子を持出て逸々に菓を進む茶畢りて桂圓湯萹豆湯あるひは杏酪鷄豆湯の類（砂糖煮也）一種又は二種出し畢て奴僕卓子を先媒人の前に居ゑ其次に相伴の卓子をもち出主人出て請々とあいさつして主人其座に侍し酒瓶をもち出て媒人の前の酒鍾に酒を斟て媒人立て得罪と挨拶して酒鍾をいたゞき卓子のうゑにおいて主人する

相伴の面々にも酒を斟で相伴のめんめんも載き媒人にむかつて請々と挨拶すれば媒人猪口を一口のむ相伴の面々も一同にのむ其時主人上菜といへば僕菜を持出て卓子の上におく主人請菜といふ媒人立て多謝といふ相伴人箸をとつて菜のよろしき所をとりわけて媒人に請々といつてさゝぐれば媒人相伴人に請先々々といふて辞譲して先一箸喫すれば皆々箸をおろし一箸つゝ喫し酒をのむ（酒一しほ数へ）の式賓客は一同に座につき目出度事を立て諱避のことあり大抵水酒寡酒などの類をいはず一雙を成雙といひ收席を成席といふの類なり單數をきらひ雙數をもちゆ

親迎
花轎


娶人新郎進門之圖

○媒人役合巹見むかひ二度目の書簡を出すと此書簡出るまへに花娘に衣服を着かへさせ花娘支度出来たりと思ふ時に媒人又二度目の書簡を出す此時に媒人より多蒙盛設深感厚意且請成席といひてさがり主人役より酒席を引く既に花娘の用意整へば内房の方より直に轎子にのせ僕など轎子を舁て廳堂に送り出す媒人ふたゝび辞儀をなし先にかへる 出立べきとき花娘の轎子を舁つゞく親類の婦女も内房の方へ返りて親類朋友なども外廳の方まで出て其後はやく女婿も主人にむかひ多謝丈人錯愛といひ又一座の客にむかひ各位先生少陪といふて立出るこれをおくらんと跡よりたてば婿不敢〻〻請留歩といふて婿廳堂の方に出れば主人堂前にて礼儀をなし媒人堂前にて主人

並びに親類朋友杯に辞儀なして先に立ち門前にて轎子にのる花娘の轎子と媒人の轎子舁上る時跡より行列をそろへ此花娘の轎子をかつぐは誠に舁出すれど其事なし又先祖四品以上の官に昇りたるものゝ子孫は執事等の儀仗をもちゆ

四品以上の官 知府布政司の類

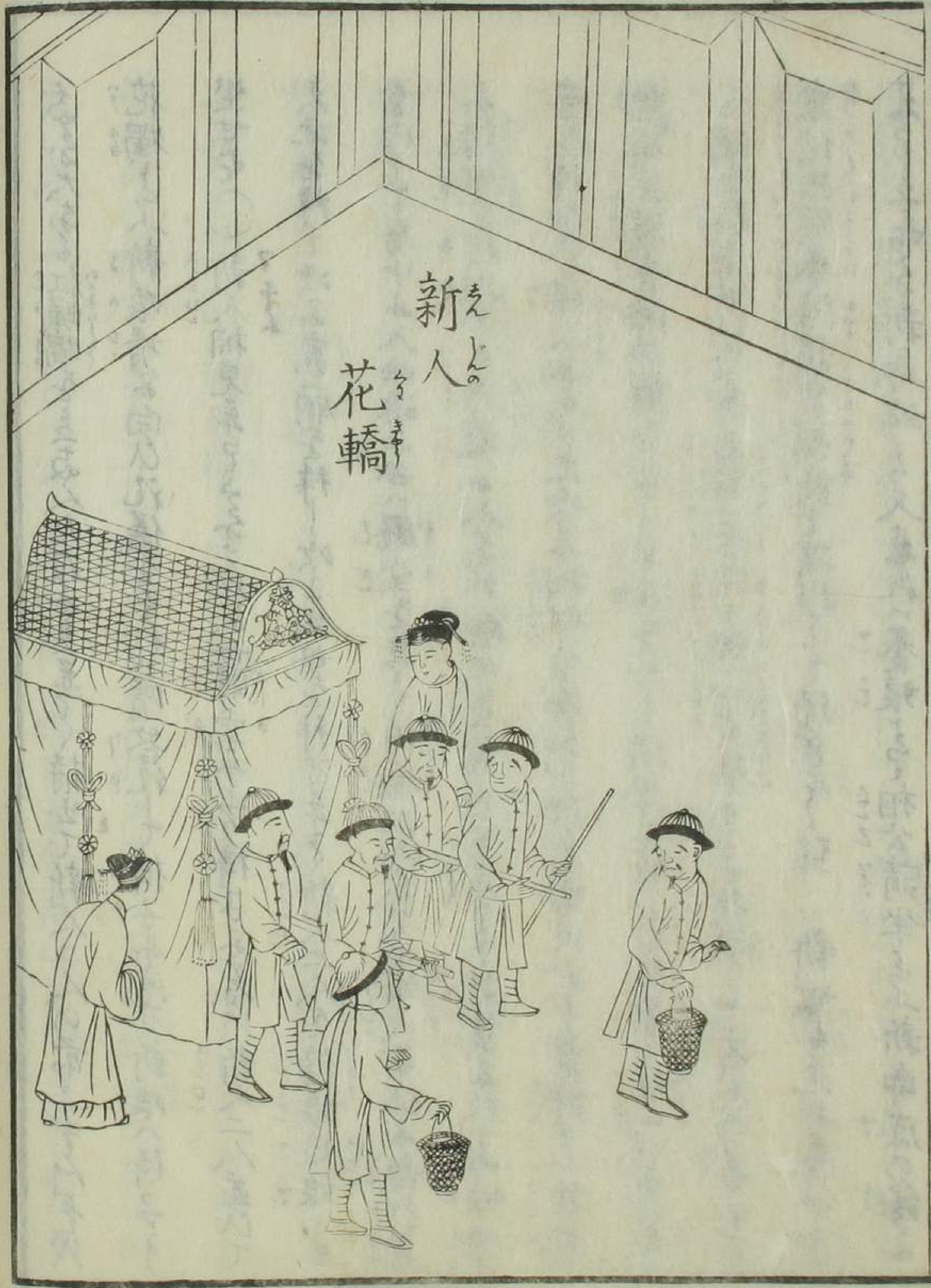
紅燈 執事 一に鸞駕といふ 鼓樂 旺相 紅黒帽 喝道

○花娘の轎子出立する跡にて新郎 花婿と 轎にのる

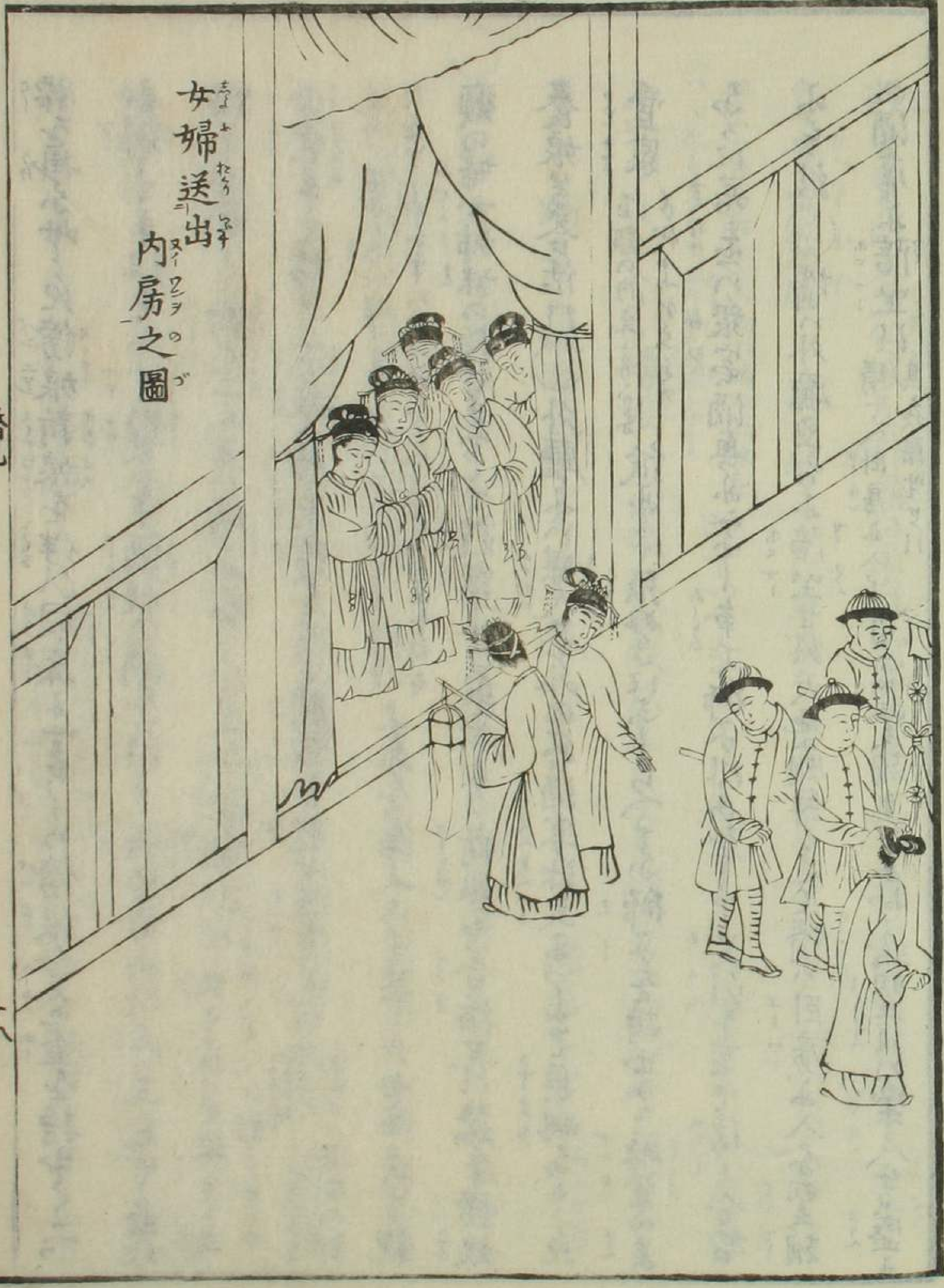
○男家よりも一丁程も前より媒人人を遣し嫁の来るよしを知らす

○男家の門前にハ人を出し並花娘の来るを伺せ並媒人の使来る時ハ並に内へ云
ら守門にも用意して主人媒人の迎として門限を出て手を揖して媒人轎
子より下り主人の前に来るべし主人ハ労駕と云媒人豈敢と答主人先に立案
内して廳堂に至る主人より請上坐と云ハ媒人不敢當と答主人再應請
坐々と云へバ媒人得罪とて椅子に着す此時に主人ハ婿内に入る其
間に新娘の轎子来れハ傍娘類婢の新娘を轎子より下し廳堂のほとりに傍
娘等両方より手を引て媒人の次に立しむ養娘等傍に付添養娘ハ乳母之類
娘の衣裳ハ下に披風袄衣と云裙并常の衣服を着し上に大紅の圓領とて
二寸前を着し頭に頭面覆と云紅の絹にての物を着る○媒人立て内に入り
婿を伴ひ廳堂に出来り花娘を新郎に相見せしむ此時親戚の内の幼
年の者らハ又ハ奴僕の内にて二人一對の燭臺に金銀にて色々の茶花を画

るもの大なる紅蝋燭を立る女人左右に並て持出て新人二人の前に出て門先へ
花燭といふ新娘婿に向ひ礼儀をすれバ婿答礼して椅子に座す新娘ハ椅子ニ
坐せしむ○新人相見終りてのち両人父母廳堂に上り椅子に着ハ新人二人並ひて
天地を拝し次に家廟を拝し次に父母を拝す終て新人二人を傍娘粮娘ども
案内して房中に入此跡に母ハ廳堂を立て内廳に入る父ハ媒人并びに親戚客
に請寛之挨拶して内廳に入る外廳の客おのおの坐定りて談話になる奴僕
茶を持出て媒人に出し次に相伴の客あまたに茶を出し茶終りて桂圓
湯扁豆湯杏酪の類を出し卓子を出し酒宴を始む主人出て媒人の盃を取
る酒を斟あたへてのち奉敬一盃種々費心多勞々々と挨拶して其外の客にも
衆位相煩ハ奉陪請寛暢飲と挨拶して酒宴なりしむ○新娘ハ先に房中より
出来り立居るに新郎跡より入来れハ養娘より相公請坐といふ新郎床の縁に



新人花轎



女婿送出内房之圖

腰を掛るに此に傍娘新娘を伴ひ同床に坐せしめ傍娘合卺盃を持出て二つに割て手にもちて鬟等酒瓶の酒を移よく二つの盃にそゝぎて盃にて移し合せて新人二人に一時に呑しむ是を合卺といふ 瓢あるひハ金銀にて造る中より二ツに割て用ゆ

合卺畢て始て花娘の頭面覆をとりて圓領を脱せ天青色の 紅桔梗といふ中の服る色也是ハ清朝の吉色にて男子ハ妾に接する事能ず先祖迄も天子よりさたゞいりある事にて是ハ庶人といへども是をする事を許さ 上着をきせて人々も其より紀母あるひは親類の婦女姉妹の類皆来りて談話して盃事あり新娘を答拝せしむ諸来傍娘養娘等答拝す ○外廳にハ媒人其外の客酒宴深更に及ぶもあり其ハ酣なるより紀管家 下部の内年とりたる者手代如の役をなすもの 紙にて張ぬきにしたる獅子を持出て廳堂の先あるに居並ぶ衆客酒興に乗じ手て獅子たはむれをなして是を見て楽く分散にて終る ○壻ハ外廳の客に陪坐せしむ天地に廟拝をして壻ハ卧房に入て翌朝の酒席に陪坐す 壻一人卧房に入て其夜陪坐せし 酒宴翌朝までにおよぶ翌日ハ楽人等盛ま

設をなしては花娘を外廳の上座に座せしめ父母並に親戚朋友等盃事し又音楽舞踏して其日の夕かたに卓子をとりて其よりは囲干を十六ならべて是は 皿の中にいろいろの菓物山海の珍味をつらねならべたもの 惜盤大盤なり 囲干とよぶ是ハ花娘多くハ房中に入りて外廳に出ず夜に入て傍娘と花娘ハ衣服をとりかへさせ聴房にのぞむ此日ハ音楽なし果ても燭臺に蝋燭を點じならべ人々なほ夜に入て酒席をおさむ 第二日目也

○第三日目にはいる花娘早くおきて父母の居間に行きて拝し房中に入る壻もおやくおきて支度して父母を拝し房中にいりて新人二人同卓にて朝飯を喫す此日より親類朋友都来道喜とて親類朋友より慶賀の贈り物をなす何れも謝帖を修するなり使の者には賞封をとらせ 婚礼の日より送るもありまた一二日遅きもあり

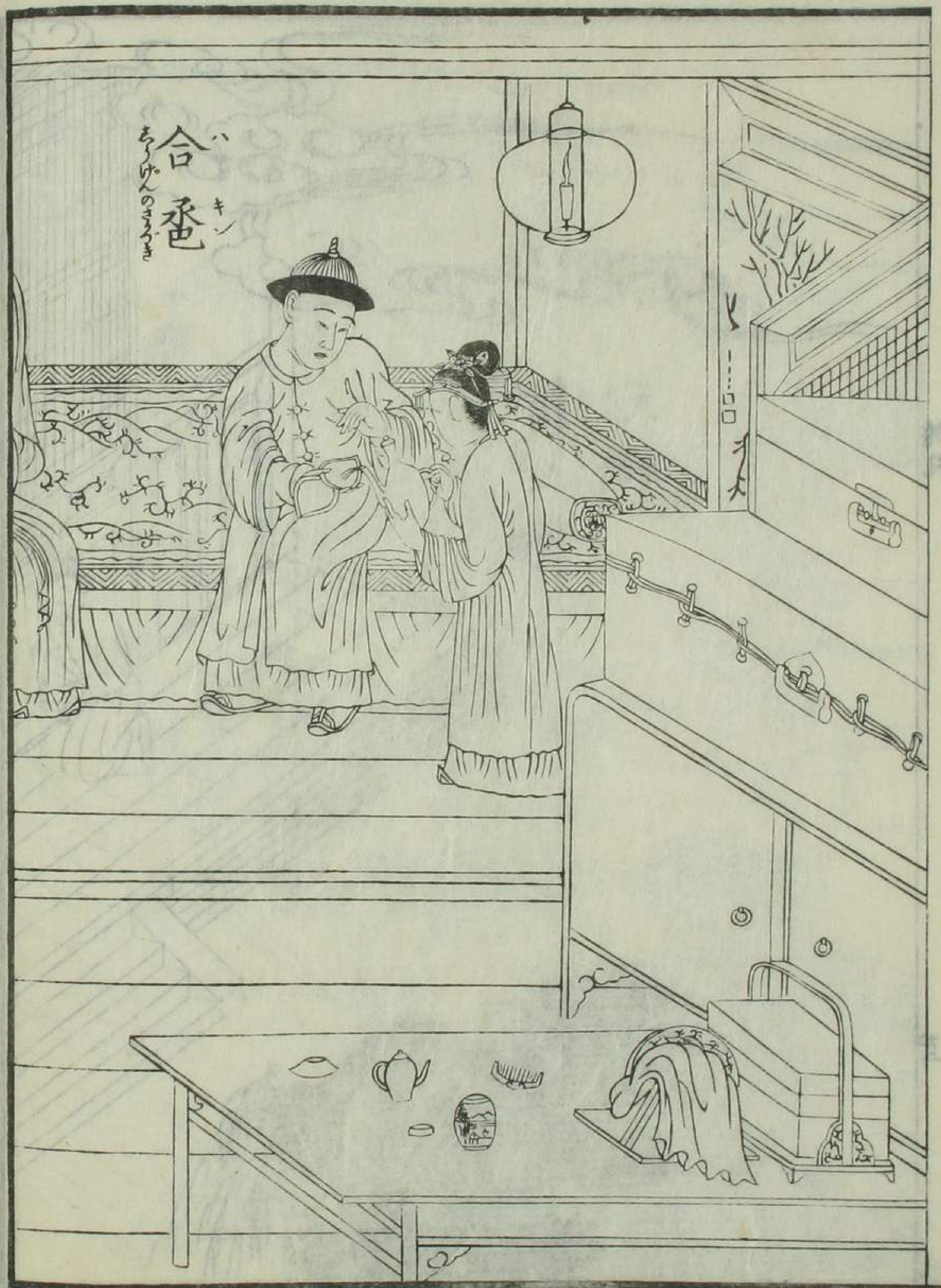
婚儀済て三日目あるひハ五日目頃に小壻の方より請帖をおくりて外父外母を招 請帖ハ文の名を記して入 外父は妻の父 外母ハ妻の母 請するに来ると先を進門といふ 外母よりも帖をおくる 此日も酒宴をもふける

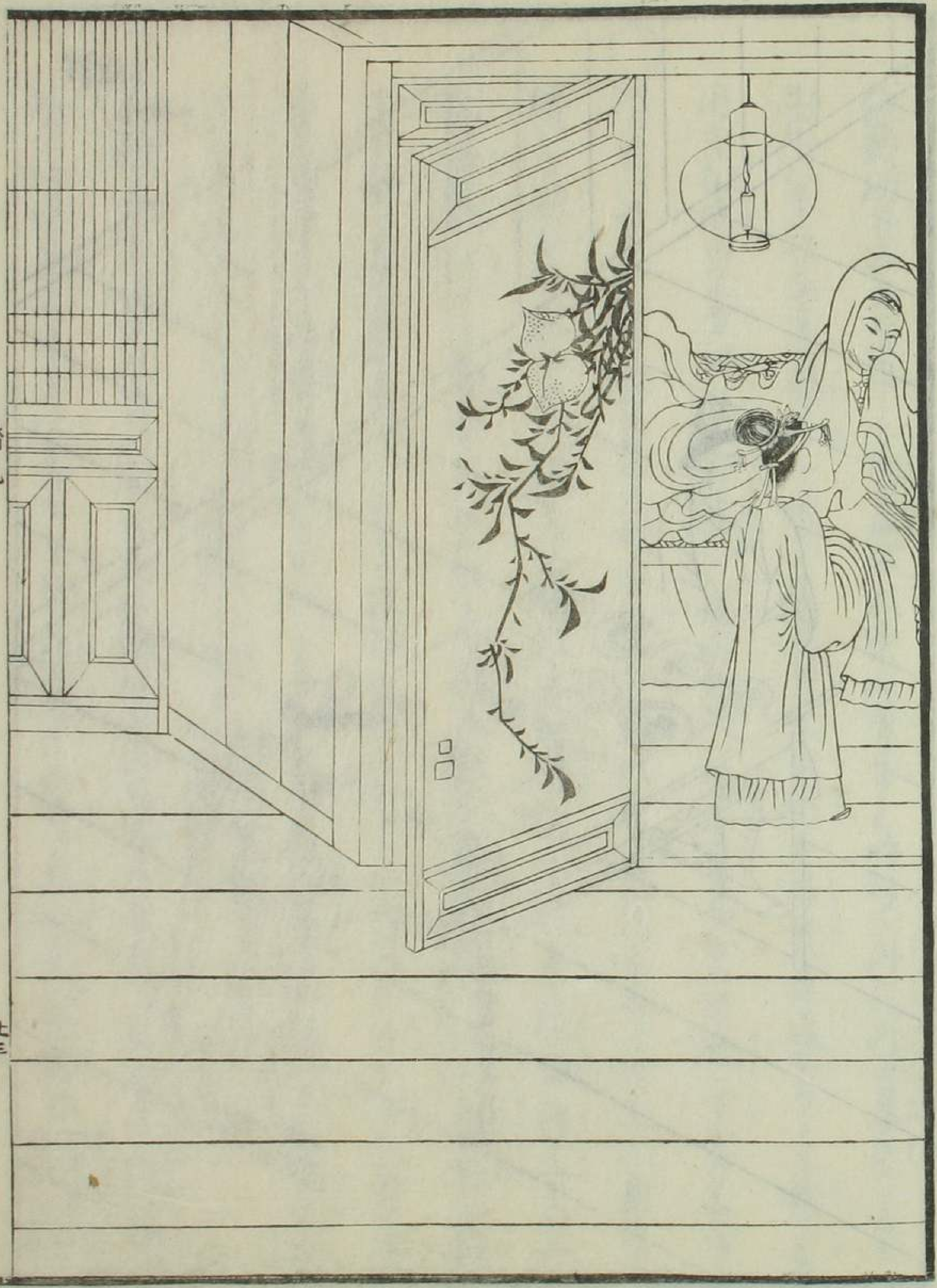
親迎歸路行位

鼓樂
喝道
紅燈
執事

吉期
鼓樂待客

新人拜天地


合卺（ハキン）
しうげんのさかづき

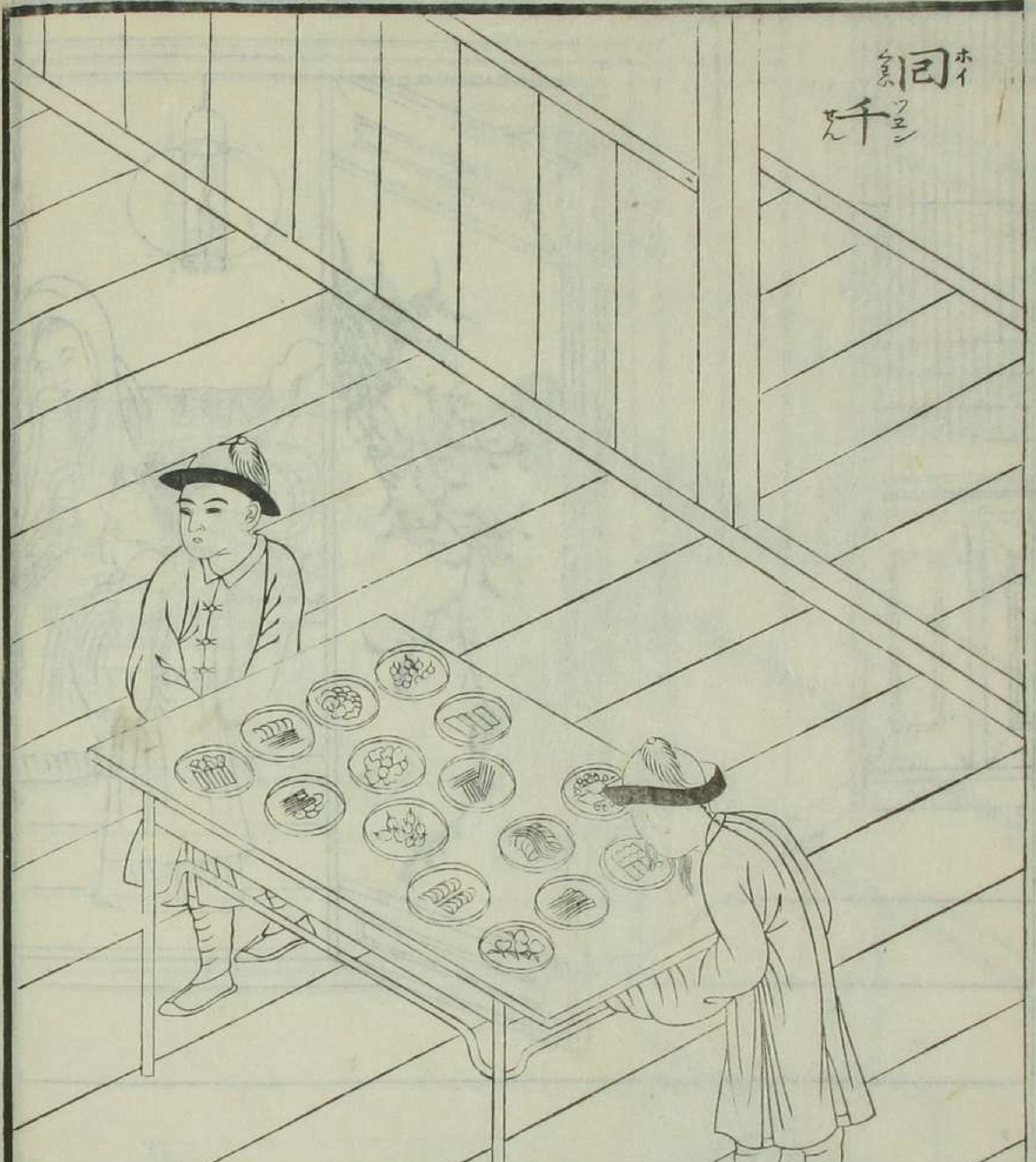


親類朋友ふも案内して饗食應す又樂人等をも呼招く外父外母暮前より出宅して迎路まで迎に轎子を用ひ近邊なれば歩行を外母は近邊なりとも轎子を用ゆ花娘の兄弟姉妹をも打連て婿の方へ一同ふ來る女は皆轎子をもちゆ

○婿の門前ふ至る下部の者うかゞひ外父外母は來るを内ふ告しらす主人並ふ婿多廳堂の門限を出むかひ手を拱き主人より敢勞移玉といふ客も豈敢々々といふ主人案内して廳上ふ至る堂客（すべて女をいふ）養娘の類出て廳上ふて迎へ挨拶し堂客ふ挨拶を其間ふ養娘の類花娘を伴ひ出て堂客に挨拶して内廳ふ伴ひゆく

○主人は外父小舅等ふ挨拶して椅子に坐せしむ婿は下座のかたに手を拱て揖す（饗食應は婚礼吉朔の時のごとし）

○内廳ふは花娘の兄弟の妻女並ふ姉妹等ふも卓子を出し饗食應す相伴ふ婿の姉妹並ふ兄弟の妻女等出て陪坐す母出て外母ふ酒を勸む（饗食應も吉朔と同し）



○酒宴済て更に杯をくんで客より挨拶を述れば主人も程合を見合せて席を納む

○進門とて数日を経て舅の方より婿を招請する事あり此時新娘も伴ひ行を回門といふ（此方の里びらきなるべし）親族を請せず ○婿舅方の門に入れば舅父廳堂の口に出むかひ案内して婿を廳堂に通らしめ下座のかたに手を拱きてひかへ丈人請坐といへば婿辞譲して不敢と答へて坐せざれば丈人強て請坐々々我也要坐すべし といへば婿得罪といふて丈人まづ主席に坐せば婿も坐す親戚朋友なども出て婿に対面して婿より逸く辞譲して請坐々々といふて皆一同に椅子に坐す

○花娘は轎子に乗りながら直に内廳まで帰る轎子よりおりて養娘など付添ひ内廳に入る ○内廳には嫁の母をはじめ姉妹姑の類までも相伴して嫁を饗應の支度を折くありて酒を勧む外廳の酒宴すめば内廳も見合せて酒宴を収む婿立て丈人に挨拶して廳を出る其のち内廳より嫁も姉妹も辞儀して外廳に出来り外廳より轎子に乗り養娘など付そひて門を出る

○婚姻の後一月程も過て嫁親里に帰省する事あり此時人事として色々贈物あり（菓物時新の物或は火腿の類等なり）親里に一月程も逗留し迎ひ来りて帰るに此時も舅の方よりも色々物を贈る（古の帰寧の遺なるべし）

○舅の方より娘に逢ひに来る時は奴僕を召つれ中遣せば嫁よりも公姑にうかゞひ其のち夫に伺ひ幾日頃にまゐるべしとて日数をさだめて実母の方に返事して其日になりて公姑夫婦に暇乞して夜をこめて親類朋友より花娘を招請する事なし婚礼の正月もあるいは寿延などの催あるにまゐる事なく嫁をつれゆく事はなし

清俗紀聞巻之八

紙獅子